稲荷山KI・安通，洞A3

——昭和54年度県営圃場整備
事業に伴なう発掘調査概報——

1981

群馬県勢多郡粕川村教育委員会

序　　文

粕川村におきましては54年より６ヵ年の計画で農村の近代化を計るべく全村を対象に県営圃場整備が実施されておりますがそれに伴って、埋蔵文化財の発掘調査を行なっております。特に54、55年の２ヵ年に至って稲荷山（深津）、安通・洞(室沢)遺跡の調査を実施し目下整理の段階に入っております。なにせ専門の調査員１人という現状の中での調査と圃場整備事業との関係等もあり思うにまかせない面もありましたが関係者各位の御協力と御理解により現場における発掘作業は一応終了しました。しかし、詳細な整理や報告書の作成作業には至っておりませんので概報で御容赦願う次第です。

御指導・御助言を賜わった関係各位に深甚なる謝意を表し序文といたします。

昭和５６年３月

粕川村教育委員会

教育長　金　井　久　雄

例　　言

1．本書は昭和54年度県営粕川地区土地改良事業に係る緊急発掘調査の概報である。

2．発掘調査は土地改良事業によって直接破壊を受ける部分について、粕川村教育委員会が県農政部の委託を受け、昭和54年度文化財保護国庫補助金、県費補助を受けて実施したものである。

3．発掘調査は1979年９月25日より、1980年１月16日まで行ない、整理は１月16日から３月31日まで行なった。

4．発掘調査は粕川村教育委員会社会教育係文化財担当の小島純一が担当し、発掘写真及び本書の写真、執筆、編集も小島が行なった。

5．遺物の実測は鈴木幸子、杉山秀宏、小島が担当し、製図は笠原嘉子、小島が行なった。又、本書の土器拓本は小沢富江による。

6．本報告の遺跡の略称は深津稲荷山遺跡がＫ２、室沢安通、洞遺跡がＡ３である。

7．本遺跡の資料は粕川村教育委員会の管理の下に保管されている。

8．遺物整理及び報告書作成協力者

石川　紀恵、小沢　富江、笠原　嘉子、小山　光子、後閑喜久江、杉山　秀宏、鈴木　幸子、田島　洋子、長井　文明、長瀬　トモ、長瀬　久子、中嶋あぐり、中島　丘子、中野ひろ子、茂木　邦子、茂木　雅子、茂木　芳子、渡辺賀津子。

9．発掘及び遺物整理において次の諸氏から御指導御助言をいただいた。心より感謝いたします。

新井　房夫、石坂　　茂、伊藤　晋祐、上野丑之助、柏崎　敦子、坂爪　久純、斉藤良太郎、設楽　博己、高橋　　哲、能登　　健、藤巻　幸男、古郡　正志、前原　　豊、増田　　修、粕川村土地改良区、粕川村第１工区、第13工区土地改良役員一同。

凡　　例

1．各遺構の縮尺は1/60が基本であるが一部には1/30のものもあるため、それぞれの図にスケールを添付した。

2．遺物の実測図は次の通りである。

K 2	全体図	1/400
	土　器	1/3
	拓　本	1/3
	石　器	1/2
A 3	土　器	1/6
	拓　本	1/3

3．土器拓本において使用したスクリーントーンは繊維土器をあらわす。

4．K 2のセクション図におけるスクリーントーンは浅間B軽石を示したものであり、A 3のセクション図におけるスクリーントーンは礫を示したものである。

5．A3 1号石組み遺構のスクリーントーンは石器及び炭化物の分布範囲を示したものである。

6．A3 1号敷石住居跡におけるセピアのラインは住居址の掘り方を示したものである。

7．水糸レベルは原則として各遺構毎に統一した。

本　文　目　次

序　　文……粕川村教育委員会教育長　　金　井　久　雄

例　　言

凡　　例

本文目次

付表目次

挿図目次

図版目次

Ⅰ　発掘調査の経緯……1

1　発掘調査に至るまで……1

2　発掘調査の経過……4

Ⅱ　遺跡と周辺の歴史的環境……7

Ⅲ　調査の概要……13

1　深津　稲荷山遺跡（Ｋ２）……13

1）　ＢＤ－１号土拡と出土遺物……13

2）　Ｃ区の出土遺物……16

3）　ＣＪ－１号住居址と出土遺物……17

2　室沢　安通、洞遺跡……27

1）　第１地点出土の遺構と遺物……27

2）　第２地点出土の遺構と遺物……33

3）　第３地点出土の遺物……52

4）　ま　と　め……58

Ⅳ　昭和54年度における埋蔵文化財発掘調査の総括……61

参　考　文　献……61

付　表　目　次

第１表　発掘経過表……5

第２表　粕川村とその周辺の遺跡地名表(1)……11

第３表　粕川村とその周辺の遺跡地名表(2)……12

挿　図　目　次

第 1 図　粕川村の位置……1
第 2 図　粕川村の遺跡と圃場整備……2
第 3 図　粕川村とその周辺の遺跡……9・10
第 4 図　K 2 遺構全体図……13
第 5 図　BD－1号土拡実測図……14
第 6 図　BD－1号土拡出土の土器……15
第 7 図　C区の出土遺物……17
第 8 図　CJ－1号住居址実測図……18
第 9 図　CJ－1号住居址出土の縄文土器 (1)……21
第 10 図　CJ－1号住居址出土の縄文土器 (2)……22
第 11 図　CJ－1号住居址出土の縄文土器 (3)……23
第 12 図　CJ－1号住居址出土の石器……24
第 13 図　CJ－1号住居址の遺物分布図……25
第 14 図　A 3 遺構全体図……27
第 15 図　1号土拡実測図……28
第 16 図　3号埋甕平面実測図……29
第 17 図　3号埋甕南北セクション図……29
第 18 図　3号埋甕実測図……31
第 19 図　第1地点出土の土器……32
第 20 図　第2地点セクション図……33
第 21 図　1号石組状遺構実測図(1)……34
第 22 図　1号埋甕実測図……36
第 23 図　1号埋甕文様展開図……36
第 24 図　1号石組状遺構実測図(2)……37
第 25 図　2号埋甕平面実測図……38
第 26 図　2号埋甕実測図……39
第 27 図　4号埋甕平面実測図……40
第 28 図　4号埋甕実測図……40
第 29 図　1号敷石住居址実測図……42
第 30 図　第2地点出土の土器(1)……45

第 31 図　第 2 地点出土の土器(2)……46
第 32 図　第 2 地点出土の土器(3)……47
第 33 図　第 2 地点出土の土器(4)……49
第 34 図　第 2 地点出土の土器(5)……50
第 35 図　第 3 地点出土の土器(1)……53
第 36 図　第 3 地点出土の土器(2)……54
第 37 図　第 3 地点出土の土器(3)……55
第 38 図　第 3 地点出土の土器(4)……56
第 39 図　第 3 地点出土の土器(5)……57

図　版　目　次

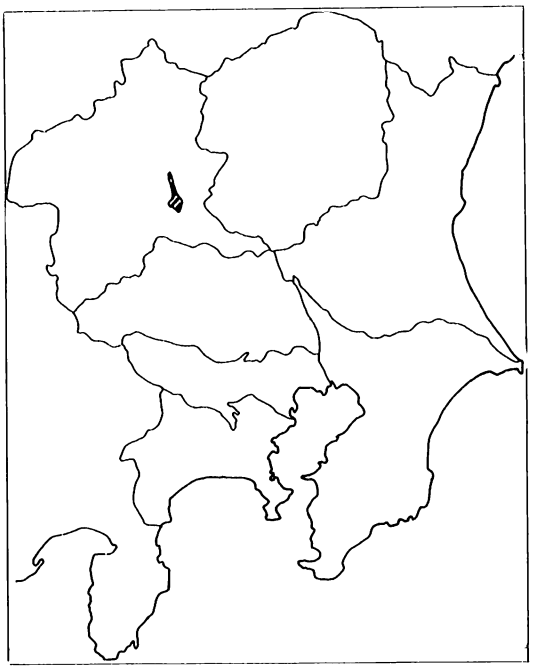
図 版 1　空からの粕川村（南方上空より）……3
図 版 2　K 2 全景（北方より）……13
図 版 3　B D－1 号土拡全景、遺物の出土状態、セクション……15
図 版 4　B D－1 号土拡出土の土器（スケール約⅓）……16
図 版 5　B H－1 号住居址遠景（北方より）……16
図 版 6　C J－1 号住居址全景（北方より）、遺物の出土状態、埋甕……19
図 版 7　1 号土拡全景（南方より）……29
図 版 8　3 号埋甕全景（南より）、セクション、出土状態……30
図 版 9　第 2 地点セクション全景（南より）……33
図 版 10　1 号石組状遺構、遠景、全景、下面の状態、遺物の出土状態、1 号埋甕……35
図 版 11　2 号埋甕全景、土器写真……39
図 版 12　4 号埋甕全景、遺物、土器……40
図 版 13　1 号敷石住居址全景（北より）遺物出土状態……43
図 版 14　第 3 地点遠景（南より）遺物出土状態……52
図 版 15　K 2，C J－1 号住居址出土の土器
図 版 16　C J－1 号住居址出土の土器
図 版 17　C J－1 号住居址出土の土器
図 版 18　C J－1 号住居址出土の石器
図 版 19　A 3，第 1 地点出土の土器
図 版 20　第 1 地点出土の土器

図 版 21　Ａ３，第２地点出土の土器
図 版 22　第２地点出土の土器
図 版 23　第２地点出土の土器
図 版 24　第２地点出土の土器
図 版 25　第２地点出土の土器
図 版 26　第２地点出土の土器
図 版 27　第２地点出土の土器
図 版 28　第２地点出土の土器
　　第２地点出土の特殊土製品
図 版 29　第２地点出土の注口土器
　　第２地点出土の岩版
図 版 30　第２地点出土の耳飾
図 版 31　第２地点出土の耳飾
図 版 32　第２地点出土の石鏃
　　第２地点出土の石鏃と第３地点出土の石鏃
図 版 33　第２地点出土の石器
図 版 34　第２地点出土の石器
図 版 35　Ａ３，第３地点出土の土器
図 版 36　第３地点出土の土器
図 版 37　第３地点出土の土器
図 版 38　第３地点出土の土器
図 版 39　第３地点出土の土器
図 版 40　第３地点出土の土器
図 版 41　第３地点出土の土器
図 版 42　第３地点出土の土器
図 版 43　第３地点出土の特殊土製品
図 版 44　第３地点出土の耳飾

Ⅰ　発掘調査の経過

1　発掘調査に至るまで

本地域は群馬県の東部、勢多郡の中央に位置し赤城山南麓の裾野の一角を占めている。中央を赤城山小沼を水源とする粕川が南北に流れ、北を標高1480ｍの赤城山小沼まで、南は標高150ｍ付近で前橋市、赤堀村、東を新里村、西を大胡町と境を接する南北に細長い地域である。（第１図）



第１図　粕川村の位置

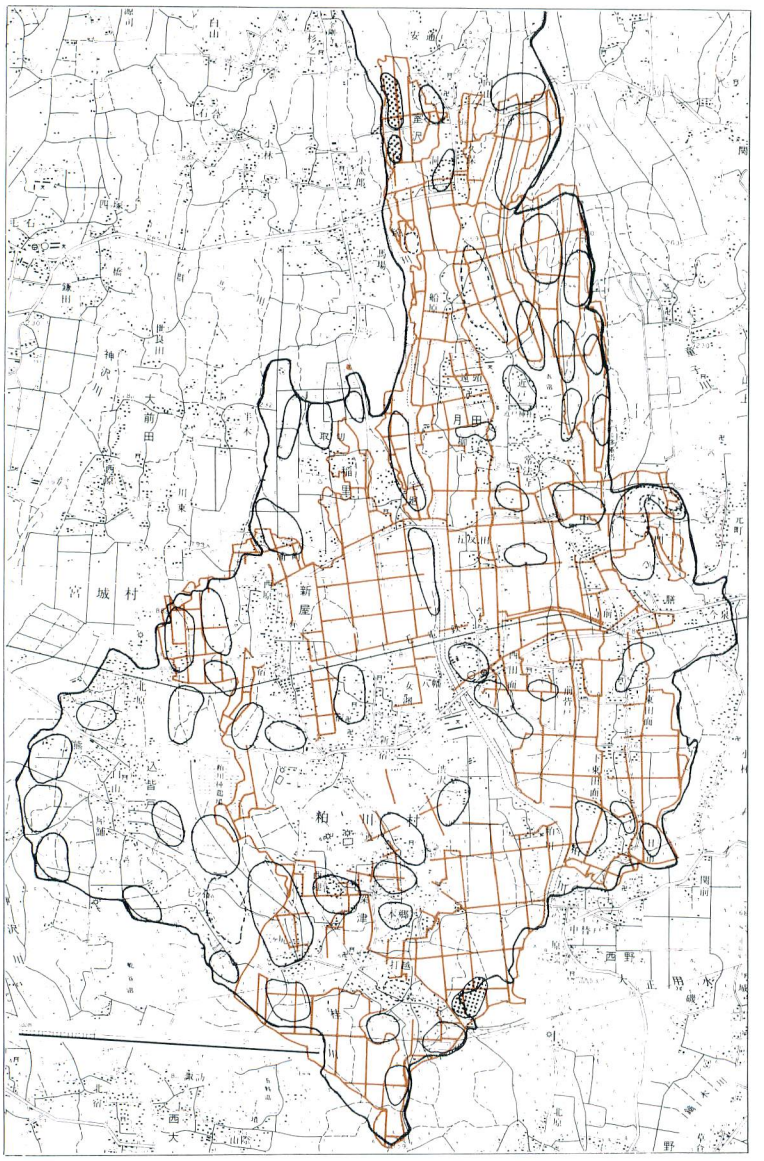
この地域は赤城山南麓に見られる養蚕を主とした典型的な畑作中心の農業地帯であり、昭和53年度より農地の基盤整備の上に、近代的農業機械を導入して、経営の合理化と生産性の増大を図るため県営圃場整備事業が行なわれることとなった。整備面積は全耕地面積の84％にあたる790 haであり、これはほぼ全村にわたって行なわれる膨大なものである。（第２図）（注１）

本地域は、考古学的には昭和23年に月田鏡手塚等の発掘が群馬大学、尾崎喜左雄教授の手で行なわれ、又、昭和40年から41年にかけては、同じく、尾崎教授の手によって中之沢湯之口の宇通廃寺の発掘調査が行なわれるなどかなり文化財に対しては関心の深い進歩的な地域として知られており、地理的にも、赤城南麓ということで遺跡の密集地帯として広く周知されていた。しかし、昭和53年度からの圃場整備事業の開始にあたっては、ほとんど文化財―特に埋蔵文化財―については顧みられず、表採、マッピングすらも十分でない地域にさえも圃場整備事業が進行するという事態となった。

このような状況の中で、県内でも著名な月田古墳群が圃場整備事業該当地域に入るにおよび、県からの指導のもとに、昭和54年度より文化財専門職員の確保などの文化財保護行政への前向きの姿勢を再び示しはじめたのである。

今回報告の昭和54年度も当初、埋蔵文化財の該当地域なしということですでに圃場整備事業へのGoサインが出てはいたが、綿密なマッピングの結果、第13工区（深津地区）内に１ヶ所、第１

工区（室沢地区）内に２ヶ所、計３ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認され、急遽、これらの処置について粕川村土地改良区、群馬用水土地改良事業所および、粕川村教育委員会の３者で話し合いが行なわれた。



第２図　粕川村の遺跡と圃場整備

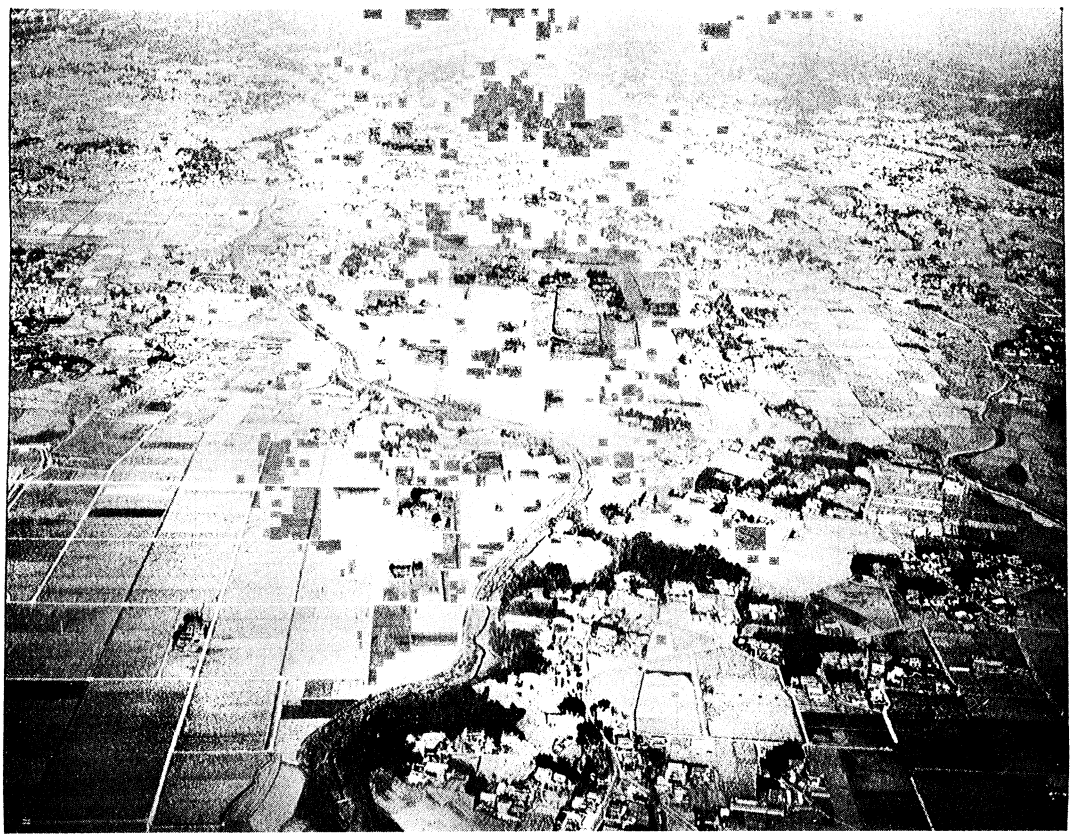
話し合いは、９月５日、12日、17日の３回行なわれ、一時は、工事側から「発掘に際しそれだけの時間と予算が必要であるのなら、今年度の粕川地区の圃場整備については施行は無理であり、そのようになった時に村で起こると思われるさまざまな問題については一切、責任がもてない。」というような発言までなされたが、県教育委員会の調停と、年度途中であるにもかかわらず国庫補助金等の措置を講じていただいたことなどによって当教育委員会と工事側両者とが歩み寄り10月12日付で群馬用水土地改良事務所より粕川村教育委員会に対し、発掘調査の委託がなされ、委託契約が締結された。

これにより発掘区域は第13工区稲荷山地域、第１工区安通、洞地域および茂呂木地域の大巾土糧カットのある部分とされた。

以上のような経緯のもとに、9月25日より発掘調査が開始されることとなった。

注

1．この図は粕川村内のおもな遺跡と土地改良により新たにできる道水路との関係を示したものである。この他工事によって大きく切り盛りのある場所がでてくるのである。いかに数多くの遺跡がこの工事によって破壊されるかがわかると思う。



図版1　空からの粕川村

2　発掘調査の経過

発掘調査は大巾に土糧の移動があり、なおかつ対象範囲の広い深津、稲荷山遺跡(Ｋ２)より着手し、室沢、安通、洞遺跡(Ａ３)および粕川８号墳推定所在地についてはＫ２の発掘終了後、同時に着手することとした。期間は昭和54年９月25日より昭和55年１月16日までの96日間、実質85日間を要した。

発掘調査は当初、２ヶ月間で終了する予定であったが、対象面積の広大さとＡ３における大量の土器の出土によって、11月12日の段階で、土地改良側と教育委員会の合意のもとに期間の延長がなされた。これに際し、地元地権者および土地改良関係者の方々には大変な理解と協力を賜ったことは記して感謝したい。

発掘調査の方法はグリット法を採用した。４×４ｍのグリットを基本として南北方向をアルファベット、東西方向を数字で表わすこととした。

まず、稲荷山遺跡においては、９月25日から調査に入ったが、対象面積が広いこと、全面が桑園であるという状況から、大型機械を導入して、桑の抜根を行ない、その後、爪を隠したバックフォーによる試掘溝を設定するという方法をとった。これにより、遺物、あるいは落ち込み等を確認した場合には、速やかにそこを拡張することとした。確認できた遺構については出土する遺物の出土状態を把握することに主眼を置いた。調査は11月２日まで行なわれた。

安通、洞遺跡では縄文後、晩期の遺跡に特有な包含層的な性格を持っていたため、遺物の平面的な出土状態は当然のこととして、さらに層位的な出土状態にも注意を払った。調査地点は３地点に分れ、南より第１、第２、第３地点とした。調査は11月５日から昭和55年１月16日までの厳冬の中行なわれ、たえず凍りつく土に悩まされながら作業を進めた。

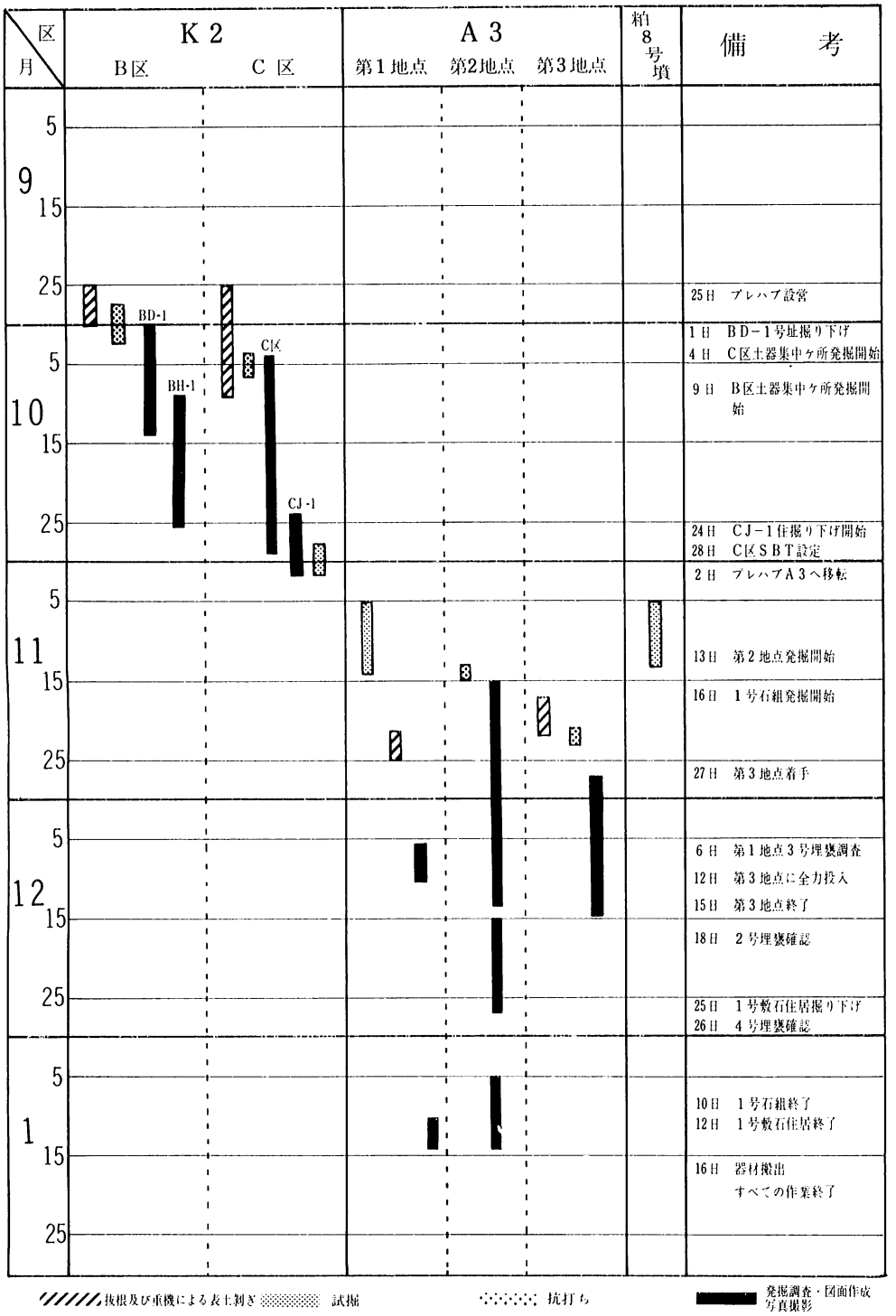
粕川８号墳所在推定地については、あくまでも所在推定地であり、現在では全く古墳の形は壊されているものであることから古墳の周溝の確認および、なんらかの遺物の発見をみることによって粕川８号墳の所在を明らかにしようとしたものであった。しかし調査の結果は意に反して、なんらの遺構、施設も確認できなかった。昭和10年の上毛古墳綜覧によれば、現在、発掘地点のすぐ東を南北に走る村道１号線の拡幅工事の際に直刀等が発見されたとのことであり、多分この工事によって、古墳は消滅したか、あるいは、道路敷の下になってしまったものと思われる。

調査は11月６日より９日までの３日間を要し、Ａ３の調査と平行して行なった。

以上のような経緯で、昭和54年度の発掘調査がすべて終了した。発掘面積は7120㎡、発掘参加延人数965人であった。(第１表)

この調査に際し、県教育委員会からは年度途中であるのにかかわらず国庫補助等いろいろ御指導を受けた。又、地元工事関係者、土地改良区、群馬用水土地改良事務所等関係各位に対し、こ

の調査終了まで深い関心と御尽力を賜ったことに心から謝意を表わしたい。



第1表　発掘経過表

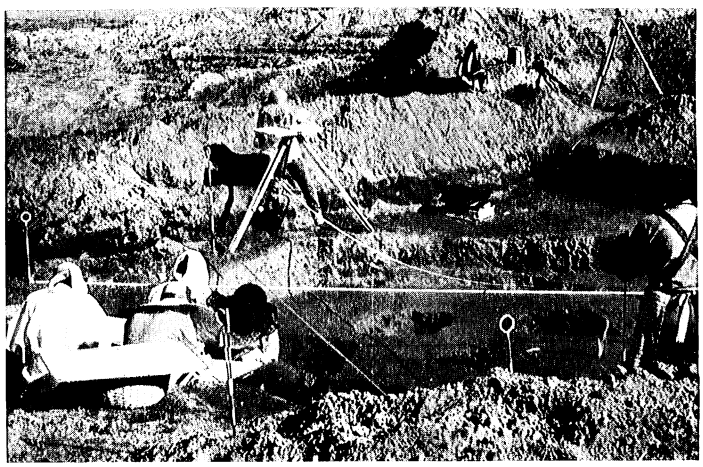
発掘調査に関する事務局の組織は下記のとおりである。

金　井　久　雄　　教育委員会教育長
白　石　高　士　　教育委員会事務局長
梅　沢　　上　　教育委員会事務局長補佐（昭和54年12月転出）
原　　茂　樹　　社会教育係長（昭和55年３月転出）
坂　本　　実　　〃　　（昭和55年４月着任）
武　井　修　一　　社会教育係主事

発掘調査の組織は下記のとおりである。
小　島　純　一　　社会教育係、文化財担当

考古学専攻生
田野倉　武　男　　国學院大学文学部学生
杉　山　秀　宏　　明治大学文学部学生
長　井　文　明　　奈良大学　　〃

発掘協力者
新井　政一、　新井　政雄、　大塚　良作、　小沢　富江、　笠原　嘉子、　鎌塚　　進、
北爪　市郎、　北爪　ハナ、　後閑喜久江、　小池　和枝、　立川誠三郎、　中嶋あぐり、
中野ひろこ、　根岸　利久、　星野　法子、　真下　孝子、　松井美佐次、　松村てる江、
宮崎　高志、　渡辺賀津子。



II　遺跡と周辺の歴史的環境

赤城山南面一帯は埋蔵文化財の宝庫である。粕川村もその例に漏れず、多くの遺跡が周知されている。しかし、その多くは新発見のものである。皮肉にも土地改良事業の進行が遺跡数の増加をもたらしたのである。その中で、村内の主な遺跡と周辺地域の主な遺跡を地図におとすとともに一覧表にまとめてみた。（第３図）（第２、３表）

粕川村には明確に先土器時代に属する遺跡は確認されていない。ただ、昭和40年刊の『日本の考古学Ｉ・先土器時代』の先土器遺跡地名表には、室沢地内で３ヶ所の遺跡名があげられている。又、深津・西原遺跡においては地元の人によって、ローム層中より石槍を発見したとの報がよせられている。

かつて赤城南面の遺跡が先土器時代の遺跡研究に大きな成果を残してきたことをみれば、粕川村でも十分遺跡の存在が予想されよう。

縄文時代においては、前期から後期にかけての遺跡が多く存在している。この中にはすでに発掘調査のなされたものもいくつか存在している。縄文時代前期中葉の遺跡として知られる室沢・大林遺跡（注１）、あるいは室沢・大平遺跡（注２）がそれである。この２遺跡は昭和37年と昭和44年に群馬大学考古学研究室によって発掘調査がなされている。この縄文時代の遺跡は、前期以前のものについては今だ確認されていない。

弥生時代の遺跡は中期のものはいまだ発見されていないが、後期、樽式あるいは赤井戸式土器の出土する遺跡としては、深津・西迎遺跡（注３）、同じく西原遺跡（注４）、一日市提頭、石切遺跡（注５）など、比較的大きな遺跡が数多く周知されている。

古墳時代には、前期の遺跡として、深津・西迎遺跡、西原遺跡、今回報告分の稲荷山遺跡、一日市提頭・石切遺跡などがあげられる。

特に後二者は、Ｓ字状口縁を有する一群の土器が比較的まとまって確認されている。中期から後期になると、本地域では遺跡の数が増大し、その遺物量も膨大なものがある。この時期の遺跡として西田面前田遺跡（注６）、あるいは中村遺跡（注７）、女渕・渋沢遺跡があげられる。これらはいずれも和泉期後半から鬼高Ｉ期にかけての大集落と考えられる。

又、この時期の古墳は群として粕川村周辺には多く見ることができる。粕川村内にも、総数38基からなる月田古墳群、あるいは深津古墳群、七つ石古墳群などが著名である。いずれも、古墳時代後期の所産である。

月田古墳群の内、六基の古墳については昭和20年代に群馬大学考古学研究室で発掘調査が行なわれている。この発掘は戦後の群馬県における古墳研究の先駆となるものであった（注８）。

歴史時代になると、奈良時代のものはあまり出土例がないが、平安時代になると、この時期の

遺物を出土する遺跡は激増する。しかし、その規模は小規模なものが多い。ただ、標高600～700m程の高所、中之沢、湯之口地内にある宇通遺跡（注9）は平安時代における山岳寺院を考える上で貴重なものであるとともに、全国でも屈指のものであろう。ここは昭和40年代に3回にわたり群馬大学考古学研究室において調査が行なわれ、礎石をもった建物址、11棟からなる荘大な遺跡が確認されている。この遺跡はかつて、群馬大学の尾崎喜左雄教授によって群馬県の中世史を考える上で貴重な遺跡であると紹介されている。

平安時代以後、中世にかけては居館址が数ヶ所知られている。文献などに登場する著名なものとしては、県指定史跡となっている膳城址、あるいは周掘の形がよく残っている女渕城址がある。

以上のように、粕川村には、先土器時代から中世にかけての数多くの遺跡が存在している。これらの遺跡が今、第2図に示すように土地改良事業の中で、危機に直面している。

我々は、これらの遺跡に対して、少しでも救いの手を差しのべるとともに、村内の人々に対し、文化財の貴重さ、大切さを少しでも理解してもらうように努めなければならないと考える。

註

1．1926年、群馬大学史学研究室にて調査。この調査で縄文時代前期黒浜期の住居址を確認。

2．1960年、1969年、群馬大学史学研究室にて調査。この調査では縄文時期黒浜期から諸磯期にかけての住居址が3軒確認されている。

3．1979年、粕川村教育委員会で調査。弥生時代後期の樽式土器と古式土師器が共伴する住居址が1軒確認された。報告書作製中。

4．1980年、粕川村教育委員会で調査。弥生時代後期の大溝、住居址2軒、古墳時代和泉期の住居址1軒などが確認された。報告書作製中。

5．1981年、粕川村教育委員会で調査。弥生時代後期の住居址11軒の他、古式土師器を出す住居址など56軒が確認された。

6．1980年、粕川村教育委員会で調査。古墳時代和泉期から鬼高期にかけての住居址が9軒確認されている。

7．1958年、群馬大学史学研究室で調査。古墳時代和泉期から鬼高期の祭祀遺跡とされている。

8．1950年から1958年にかけて群馬大学史学研究室で調査。

9．1966年、1967年群馬大学史学研究室にて調査。短報が、1967年、月刊文化財12に掲載されている。

番号	名　称	所　在　地	時　代	種　別	備　考
1	稲荷山遺跡	深津稲荷山	縄文～平安	集落址	今回報告遺跡
2	安通・洞遺跡	室沢安通、洞	縄文中～晩	包蔵地	〃
3	宇通廃寺	中之沢御殿	平安	寺院址	昭和40年6月、昭和41年3～4月昭和42年9月、群馬大学にて一部調査、村指定史跡
4		中之沢湯ノ口	縄文中	包蔵地	
5		中之沢清水沢	縄文前	包蔵地	
6		中之沢清水沢	縄文前	包蔵地	
7		中之沢向山	縄文前	包蔵地	
8	大林遺跡	室沢大林	縄文前	集落址	昭和37年、昭和44年、群馬大学調査、村指定史跡
9	大平遺跡A	室沢大平	縄文前～中	集落址	
10	峯屋敷遺跡	室沢 峯屋敷	縄文前	集落址	
	(室沢砦跡)		中世～江戸	館址	稲川村指定史跡
11	大平遺跡B	室沢大平	縄文前	集落址	昭和35年、群大にて調査、村指定史跡
12		室沢宿	縄文中	集落址	
13		月田長峰	縄文	包蔵地	
14	室沢古墳群	室沢石原	古墳	墳墓	3基の古墳が周知されている。内一基のみ現存。
15	月田古墳群	月田富士ノ宮	古墳	墳墓	推定39基から成る古墳群、内、県指定史跡2基を含む、6基は群大にて調査
16		月田湯ノ窪	縄文～中世	包蔵地	
17		月田新高	縄文前	包蔵地	
18		月田芝坂	縄文～中世	包蔵地	
19		稲里大光寺	平安	集落址	
20	中村城跡	中村浄法寺	中世	館跡	村指定史跡
21	中遺跡	中村中町	縄文中～古墳	包蔵地	
22	新宿遺跡	膳 新宿	縄文中～中世	包蔵地	
23	膳城跡	膳 大門	中世	館跡	県指定史跡
24		稲里取切	縄文中～平安	包蔵地	
25		新屋矢次	縄文中	包蔵地	
26		新屋半ノ木	縄文中	包蔵地	
27		新屋山街道	平安	包蔵地	
28		新屋浦町	平安	包蔵地	
29		新屋西原	平安	包蔵地	
30		西田面 西原	古墳	集落址	
31		西田面 前田	古墳	集落址	
32		西田面前皆戸	平安	包蔵地	
33	伊勢森古墳	上東田面伊勢森	古墳	墳墓	
34		上東田面自音寺	古墳		
35	女渕城跡	女渕宿	中世	館跡	村指定史跡
36		新屋桜塚	古墳～中世	包蔵地	
37		新屋稲荷田	古墳	包蔵地	
38		込皆戸熊ノ穴	縄文中	包蔵地	
39		込皆戸御殿山	古墳～中世	包蔵地	

第2表　粕川村とその周辺の遺跡地名表（1）

番号	名　称	所在地	時　代	種　別	備　考
40		女渕渋沢	古墳後	集落址	
41	一日市城址	一日市、一日市	中世	館　跡	昭和55年度調査
42	提頭遺跡	一日市提頭	縄文前、弥生～平安	集落址	
43		一日市関後	平安～中世	条理？	
44	近戸神遺跡	深津近戸	弥生～中世	集落址	
45		深津長岡	弥生～古墳	集落址	
46		込皆戸熊ノ穴	古墳	包蔵地	
47	西迎遺跡	深津西迎	縄文後、弥生～古墳	集落址及び墳墓	昭和54年度一部調査、古墳は数基現存
48	坂田城跡	深津友成	中　世	館　跡	
49	西原遺跡	深津西原	弥生先土器	集落址	昭和54年度調査
50	七つ石古墳群	込皆戸七つ原	古墳	墳　墓	前橋部分を一部前橋教委で昭和54年度調査
51	丸山古墳	深津丸山	古墳	墳墓	
52		深津縄引	弥生～古墳	集落址	
53	丸塚古墳	深津権現堂	古墳	墳墓	
54	轟山古墳群	赤堀村今井古沢峰	古墳	墳墓	
55	吉沢峰遺跡	赤堀村今井古沢峰	弥生	集落址	
56	毒島城址	赤堀村今井毒島	中世	館　址	
57	茶臼山古墳	赤堀村今井毒島	古墳	墳墓	
58	多田山古墳群	赤堀村今井多田山	古墳	墳墓	
59	縄引遺跡	前橋市西大室縄引	弥生～古墳	墳墓	昭和55年度、前橋教委で一部調査
60	二子山古墳群	前橋市西大室	古墳	墳墓	国指定史跡、前二子、中二子、後二子山古墳跡
61	千五郎塚古墳	赤堀村今井田向	古墳	墳墓	
62	峰岸山遺跡	新里村峰岸	弥生～古墳	墳墓及び集落址	昭和49年度調査、新里村教委で調査
		赤堀村東峰			昭和　年度調査、赤堀村教委で調査
63	天幕城址	赤堀村峰岸	中世	館跡	
64	赤堀城址	赤堀村今井城	中世	館跡	
65	東城址	新里村山上堂城	中世	館址	
66	大室城址	前橋市西大室町城	中世	館址	
67	荒子の砦跡	前橋市荒子町舞台	中世	館址	
68	白山古墳	宮城村苗ヶ島白山	古墳	墳墓	
69	新山古墳	宮城村馬場新山	古墳	墳墓	昭和33年、昭和40年、群大にて調査
70	矢次遺跡	宮城村馬場矢次	縄文中～後	集落址	昭和44年調査、県教委にて調査
71	枡形遺跡	宮城村馬場苗ヶ島枡形	先土器	包蔵地	昭和49年相沢忠洋氏調査
72	武井遺跡	新里村武井寄居山	先土器	包蔵地	昭和29年明治大学調査
73	石山遺跡	赤堀村下触石山	先土器	包蔵地	昭和40年相沢忠洋氏調査
74	山上城址	新里村山上城山	中　世	館址	

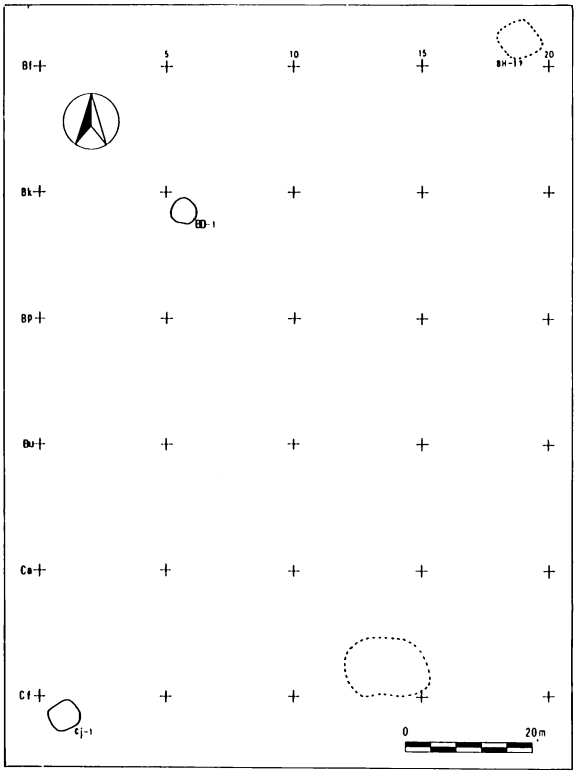
第3表　粕川村とその周辺の遺跡地名表（2）

III 調査の概要

1 深津・稲荷山遺跡(K2)

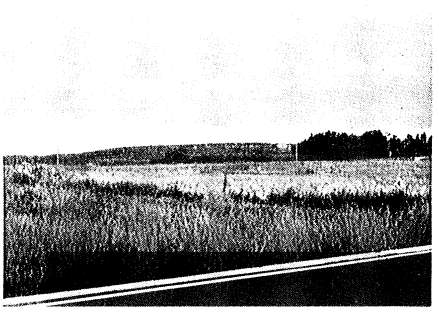
稲荷山遺跡は粕川村大字深津字稲荷山に所在する。粕川村の南端、粕川の右岸、佐波郡赤堀村と境を接するところに位置し赤掘村より北に延びる多田山丘陵の北端の一角を占めている。同じ丘陵の南側、赤堀村分には轟山古墳群や弥生時代の遺跡が知られ、南方約1kmのところには、前期古墳として著名な茶臼山古墳が存在している。

当初、この稲荷山遺跡は北向上の斜面ということもあって埋蔵文化財の概当地域とは見なされていなかったが、周辺の歴史的な環境を考えるならば十分それらと関連する遺跡の存在が予想された。そこで、教育委員会では遺跡での表面採集を行ない、遺跡の範囲を把握するとともに群馬県との発掘調査委託契約に基づいて9月25日より11月2日までの38日間にわたって発掘調査を実施し、縄文時代前期の住居址1ヵ所、古墳時代前期の土器密集ヵ所2ヵ所、平安時代の土拡1ヵ所を確認し記録にとどめた。(第4図)



第4図 K2遺構全体図

以下、これらの遺構及び出土遺物について記述していく。



図版2 K2全景

1) BD−1号土拡と出土遺物(第5・6図、図版3・4)

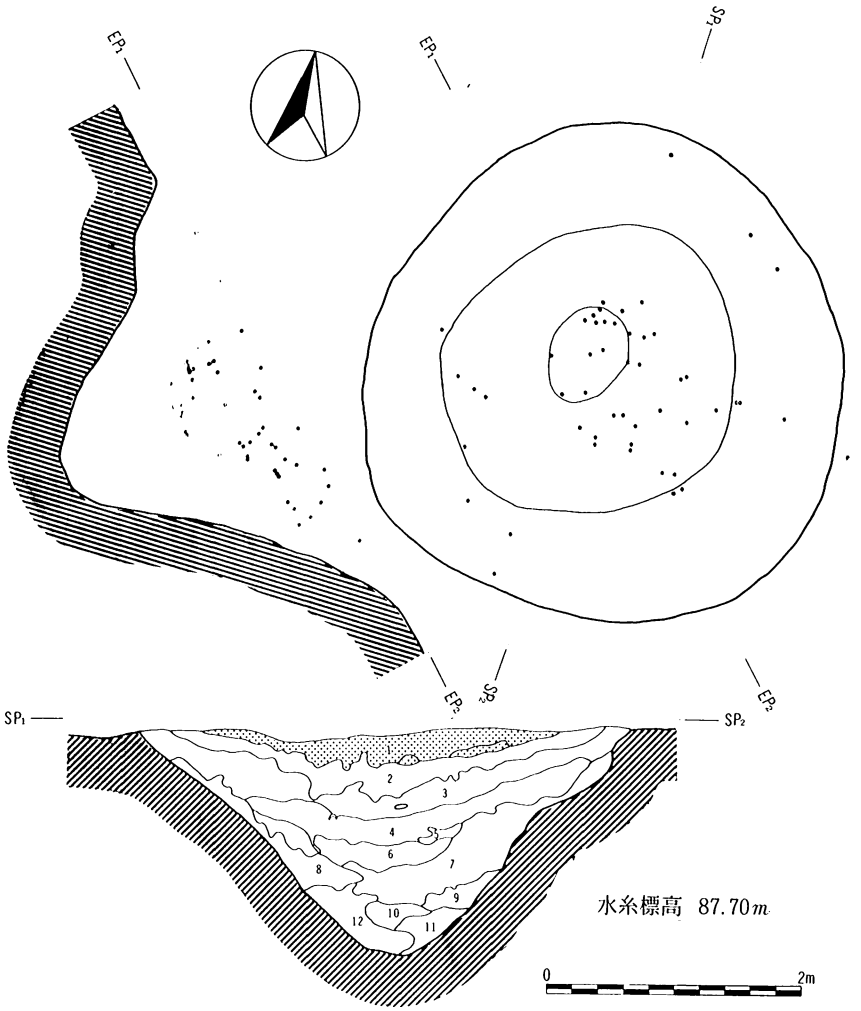
遺構(第5図、図版3)

BD−1号土拡はBk−11区に位置し、遺構はローム層を深く掘り込んで作られている。

遺構の最大径4m、最小径3.7m、深さ1.7mを測る。平面形はやや不整形な円形を呈し、断面形はすり鉢状をなす。

覆土は色調及び土質などにより12層に識別され、最上層には、浅間B軽石（天仁元年＝1108年起源）が純粋な形で明瞭に認められた。

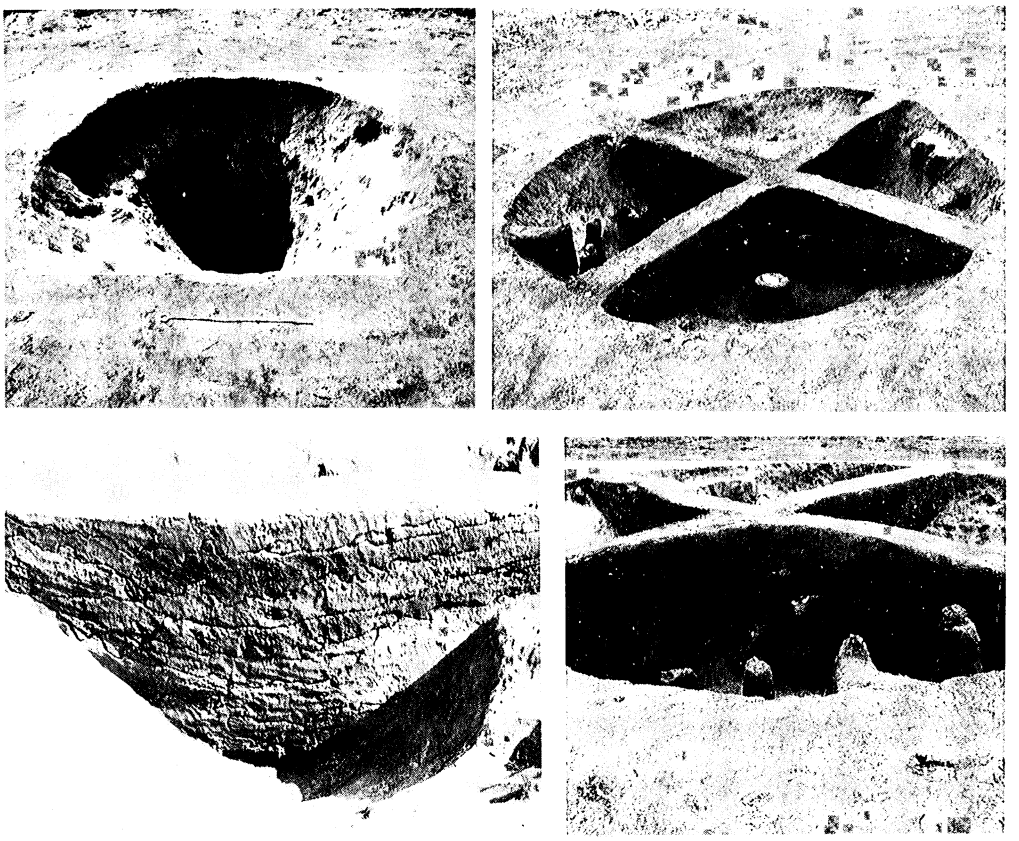
遺物は覆土第1層から第4層までの間に集中してまんべんなく認められた。



第5図　ＢＤ－１号土坑平面図

ＢＤ－１　土壌説明

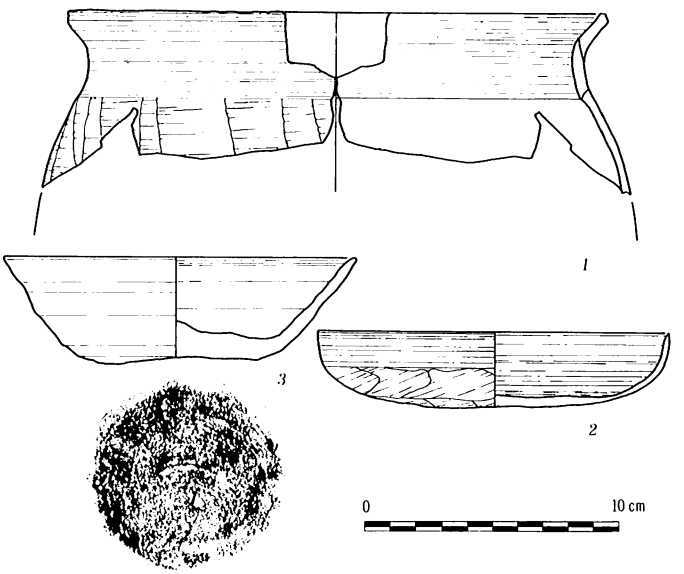
1層　暗紫褐色土層。やや砂質。下部にB軽石の純層を含んでいる。
2層　黒色土層。粘性に富み、しまりもよい。12層中最も黒色の強い土である。C軽石、ＦＰを多く含む。
3層　灰褐色土層。粘性、しまりは2層より劣るが、C軽石、ＦＰは2層と同様多く含む。
4層　暗灰褐色土層。3層に似ているが、やや色調的に明るみを増す。C軽石、ＦＰを含む。
5層　黄灰褐色土層。全体的に黄色味が強い。粘性、しまりは悪くボソボソした感がある。
6層　灰褐色土層。色調的には3層に似ているが、やや明るみを増す。粘性、しまりともに悪い。
7層　明褐色土層。6層よりさらに明るみを増す。粘性は6層よりよい。
8層　黄褐色土層。ローム質の土壌である。壁の崩落土であろう。
9層　黄色ローム質土層。ロームであるがしまりが悪くボソボソした感じがある。
10層　黄褐色土層。色調的には8層に似るが、ローム粒子をかなり多く含むため黄色味が強い。
11層　暗灰褐色土層。色調的には4層に似ているが、かなり粘性は強く砂粒を若干含む。
12層　黄褐色土層。色調的には10層に似ているが、ローム粒子、ロームブロックをかなり多く含む。



図版3　ＢＤ－１号土坑

出土遺物（第６図、図版４）

１は口縁部がコの字状の屈曲を有する甕形土器である。口唇部はやや肥厚する。土器外面の調整は口縁部屈曲部までは横ナデ、屈曲部より下部は横方向右から左へのヘラケズリによる調整痕が認められる。内面はよく調整されており、口縁部のみに横ナデが認められる。口縁部のみ、５分の２ほど現存。



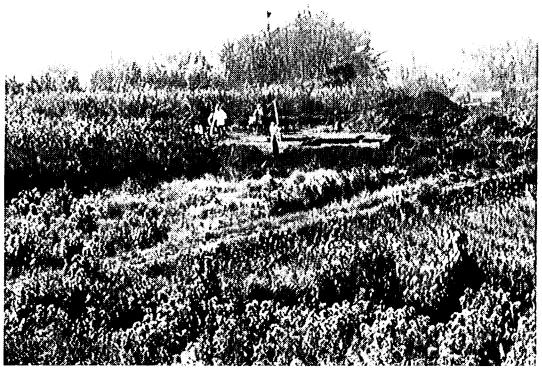
第６図　ＢＤ－１号土坑出土の土器

2は杯形土器である。口縁部には横ナデ、胴部下半から底部にかけてはヘラケズリによっての調整がなされている。内外面ともにタール状の付着物が認められる。

3はロクロ整形による須恵質の杯形土器である。胎土には小礫を多く含んでいる。底部は糸切りののちヘラにより調整されている。

このＢＤ－１号土坑の構築時期であるが、一応、浅間Ｂ軽石の堆積をみていることから浅間Ｂ軽石降下以前、つまり、12世紀前半以前～９世紀ごろまでと考えたい。

図版４　ＢＤ－１号土拡出土の土器



図版５　ＢＨ－１住遠景

Ｂ区には、このＢＤ－１号土坑の他に古墳時代前期の住居址と思われる遺物の集中出土地点をＢｔ－18区周辺に確認したが、遺構の掘り込み面が現在の耕作面からかなり近いところにあるため、出土遺物のほとんどが、復元が不可能なほどの細片となっていた。また遺構の掘り込みも全く確認できなかった。しかし、遺物の出土状態を微細に記録していったところ、遺物の出土する場所と、全く出土しない場所との境が明瞭となり、それが方６ｍほどの方形となった。そのため、一応住居址様の遺構としてとらえておきたい。出土遺物については、わずかにＳ字状口縁をもつ土器の破片を明らかにしたにすぎない。（図版５）

２）　**Ｃ区の出土遺物**（第７図）

Ｃ区でもＢ区と同様に土器の破片を大量にしかも、ある限定された範囲内に出土する地点が１ヵ所確認された。しかし、Ｂ区の土器密集カ所と相違する点は、比較的大型の破片が多いこと、土器の出土する範囲がＢ区と比較してかなり広いという点である。

出土遺物　（第７図）

１はＳ字状口縁を有する台付甕であろう。口縁部の破片と同一個体と思われる胴部の破片がかなり確認されたが、完全な形に復元することはできなかった。器壁は薄く２㎜ほどである。

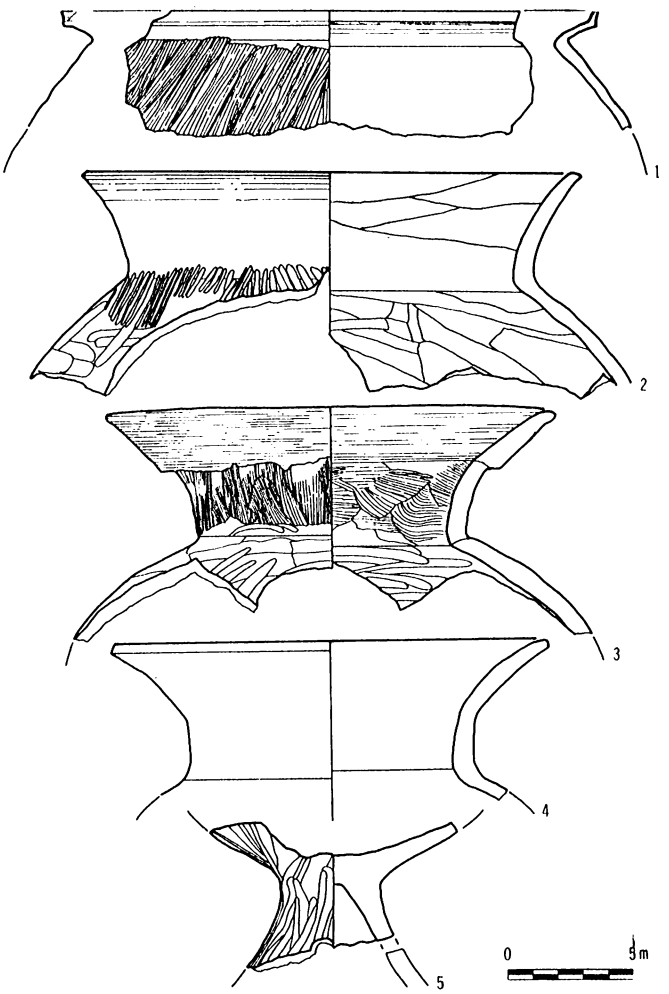
2は単口縁を有する甕形土器であろう。外面はよく磨かれているが内面にはハケによる調整痕を残している。

3は折り返し口縁を有する壺形土器である。全体の器形は頸部から鋭く屈曲する球形の胴部をもったものであろう。外面は目の細かいハケ状工具により調整されている。内面は頸部に対しハケ目の調整痕を残しているが、他は、よく磨かれている。

4は、単口縁を有する壺形土器である。器壁が荒れているため調整の状態を読みとることができない。

5は3個の透かし穴をもった高杯形土器の脚部である。外面は細かく磨きがかかっている。

以上の出土土器から考えて、このC区の土器密集カ所は古墳時代前期の所産と思われる。



第7図　C区の出土遺物

3）　**CJ－1号住居址の遺構と出土遺物**（第9～13図　図版15～18）

本住居址はC区の西際、Cf－2～4グリッド間に位置し、ローム層への漸位層的なローム質の暗褐色土層上面でプランの確認をし得た。

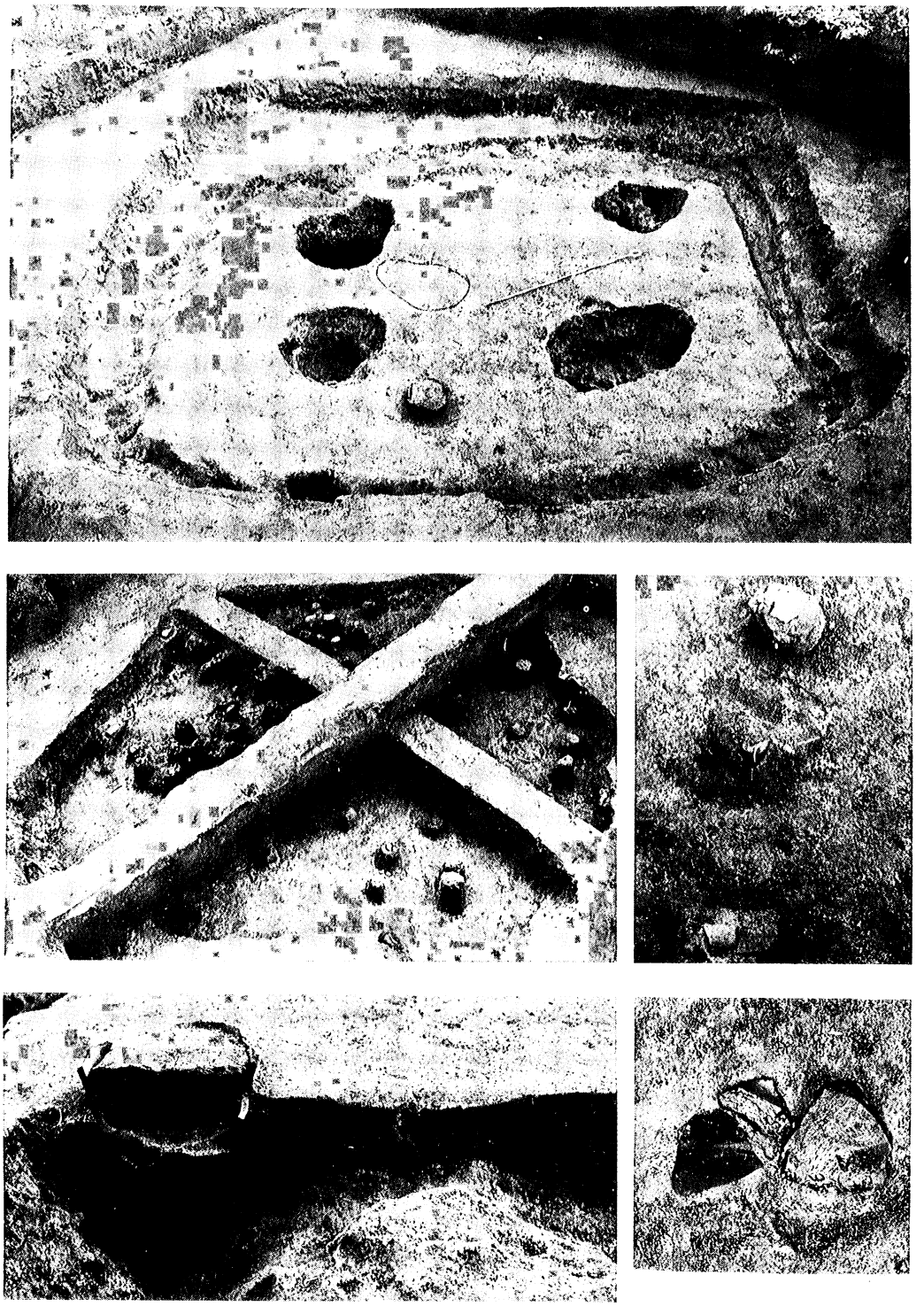
住居址の平面プランは長辺6.60m、短辺3.60mのやや不整形な長方形を呈する。長軸方向は、N－42°－Eを指す。

覆土は土層断面図（第8図）に示されるように五層に分かれる。主な覆土は固くしまった暗褐色土層であり、20cm前後で堆積している。

住居址の確認面からの壁高は北側で30cm、南側で15cmを計る。

周溝は四壁下に認めることができるが南壁下のそれは、壁下場より50～70cm程内側を巡ってお

第8図　ＣＪ－１号住居址実測図



図版 6　ＣＪ－１号住居址

り、一見すると拡張住居のような感じを与える。周溝の深さは4㎝内外と浅く、深さはほぼ一定しているが、幅は南壁、周溝が壁からもっとも離れたところで約40㎝、それ以外では約10㎝となっている。

炉は床面中央よりややピット1、ピット2よりにつくられ、地床炉であるが焼土は薄く、5㎝程が認められた。

柱穴は4本が確認できた。ピット1は深さ35㎝、ピット2は69㎝、ピット3は57㎝、ピット4は47㎝を測る。ピット2は、この4本の柱穴の中では、一番大きく掘り方もしっかりしており、下方にいくにしたがって壁がオーバーハングしている。

北西壁寄り、ピット1とピット4との中間には埋甕が認められた。(第8図、図版6)

出土遺物(第9～12図、図版15～17)

土器(第9・10・11図、図版15～17)

本住居址出土の土器は大きく分類して7つに分けられよう。

4、15、16、18、20は地文として斜縄文あるいは撚糸文を有し、口縁部より、平行沈線を垂下させ、それらを同一工具による斜行する平行沈線によって接続させるものである。

15、16は地文として縄文をもたない。

1～3、12～14は、地文として縄文をもたず、平行沈線が施されているものである。1、2は口唇部下に、Lの縄文の圧痕が一段おされている。12、13は、平行沈線と円形刺突文をもったものである。

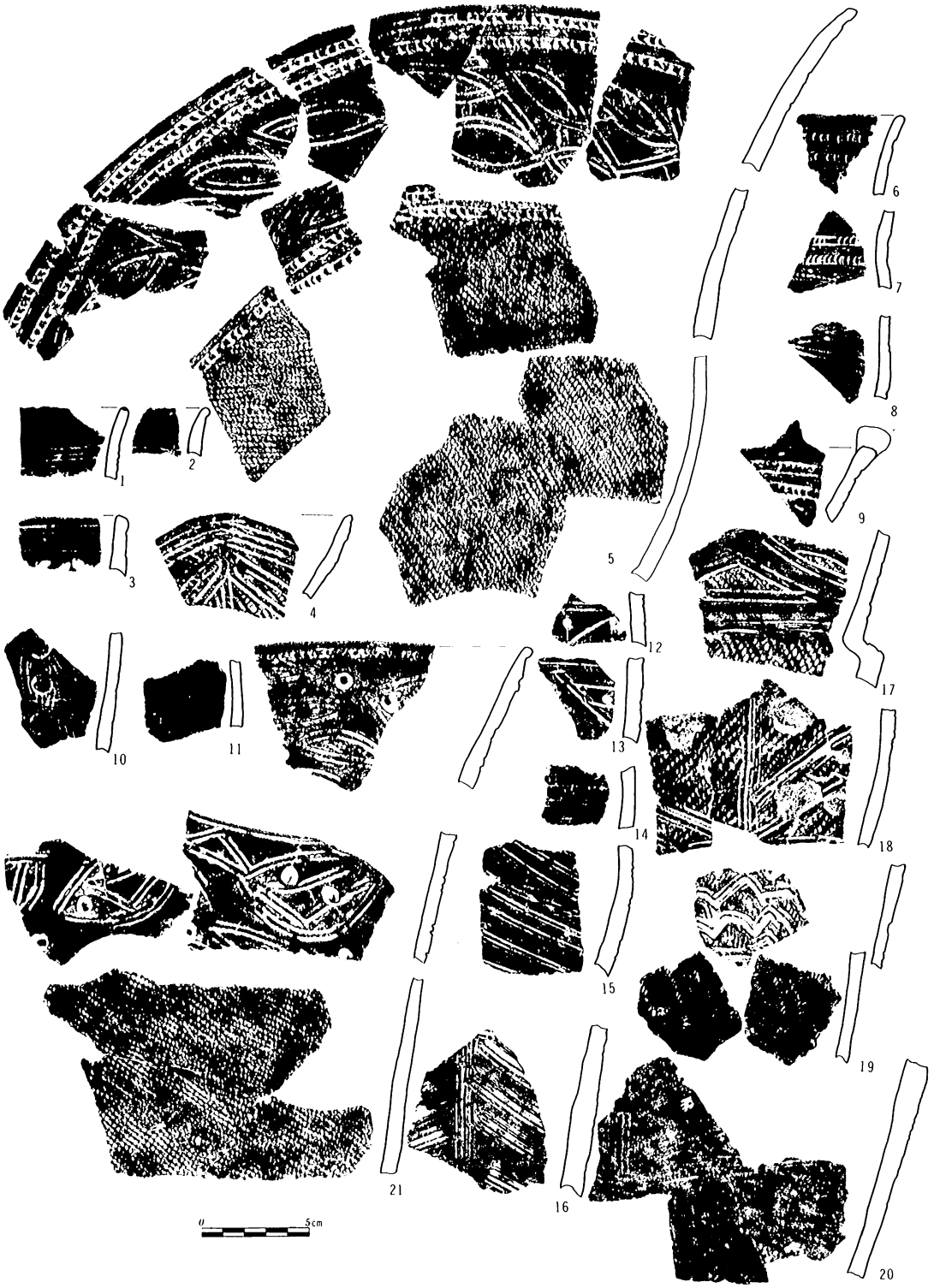
5～9、17、21は、胴下半には縄文、あるいは撚糸文を有し、口縁部に1段ないし2段の連続爪形文を施し、その下に半截竹管による木の葉のような文様を描いている。17、21は、地文としての撚糸文を、所謂、木の葉文の中に施しているものであり、17は、胴部に1段の鋭い屈曲を有するものである。

19は、地文に撚糸文を有し、その上に平行沈線による連続山形文が施されているものである。

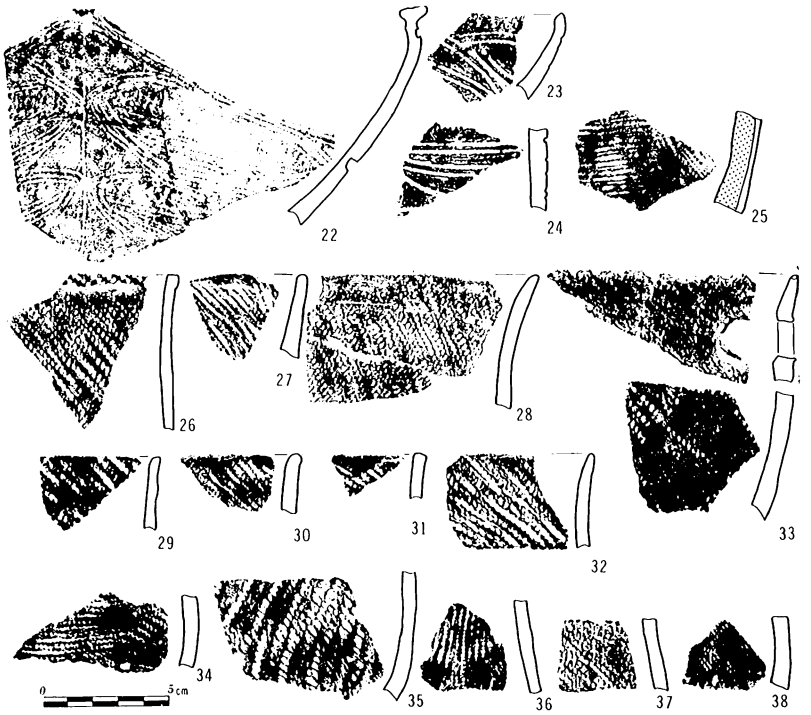
10、11は、地文の撚糸文の上に円形刺突文が施されたものである。

22、24は、大きな波状口縁を有する深鉢形土器であろう。地文としての縄文をまったくもたず、竹管による沈線、あるいは条線で、木の葉様の文様を描いており、その上を2～3本の歯をもつ竹管で連続刺突が施されている。22～24ともに、胎土はよく精成され、焼きもよい。22は、口唇部に小さな突起をもったものである。

25～38は器面全体を縄文でおおうものである。25は胎土に所謂、繊維痕をみとめ得るものであり、この一片しか確認されなかった。器面には2種類 の縄文が施されている。この土器は直接、本住居址とは関係あるものではなく、より古い段階の土器としてとらえられよう。



第9図　ＣＪ－１号住居址出土の縄文土器（１）



第10図　ＣＪ－１号住居址出土の縄文土器（２）

26～28の土器も斜縄文を有するものと、撚糸文を有するものに分けることができる。25はＲの撚糸文を有し、口縁の肥厚するものである。又、29は口縁に刻みを有し、円孔を有する土器である。拓影は上下が逆で、台形土器であるかもしれない。

39～45は、土器の底部及び完形土器を一括した。39は本住居址に埋没された埋甕である。胴下半にはＲの細かい撚糸文が施文されている。口縁部には竹管による条痕文が施されている。底部は抜かれていて残存していなかった。45は第１ピット内より出土した浅鉢形土器であり、外面はよく調整されており、その痕が明瞭にみとめられる。

以上が本住居址出土の土器であるが、これらは縄文時代前期後葉の前半に位置付けられよう。

石器（第12図、図版18）

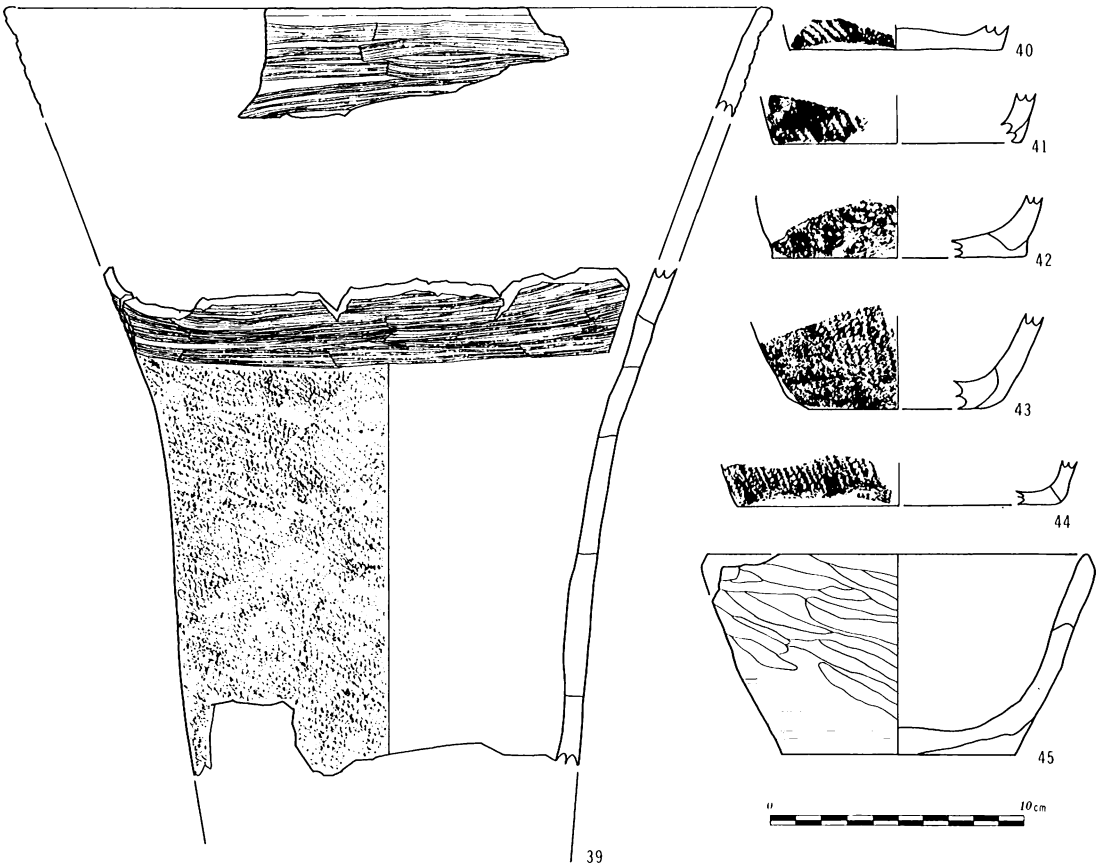
１は安山岩製のすり石を敲石として転用したものである。表、裏面の上部、及び、右側面には敲打痕がみられる。底面は一回の打撃で半截され、平坦な面を作出しているが、周辺には小さなつぶし痕、及び、小剥離痕がみられる。

２はやや風化しているが、ハリ質の安山岩製の横形の石匙である。

３は揆形を呈する石斧である。石材はホルンフェルス。

４は頁岩製の石核である。正面右側には細かな刃こぼれ、あるいは、磨滅がみとめられる。石核をスクレイパーとして転用したものである。打面部右側辺には、自然面を残している。

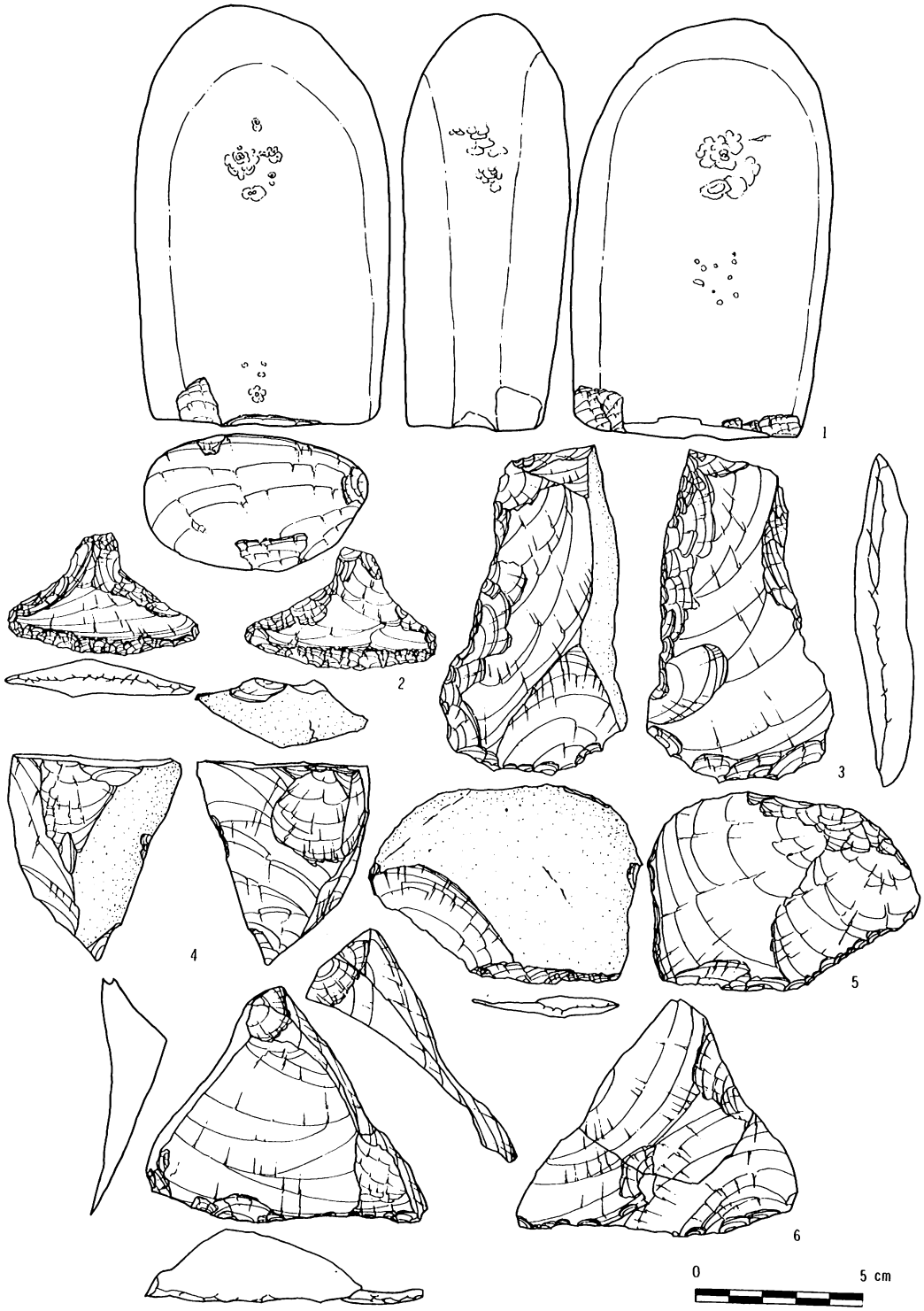
５は正面に自然面を大きく残した剥片を用いたスクレイパーである。ほぼ全周にわたって細かな鋸歯状の歯こぼれがみとめられる。頁岩製。



第11図　ＣＪ－１号住居址出土の縄文土器（３）

６は（図版６右下）でみられるような出土状態を示し、３点のフレイクが接合したスクレイパーである。接合する２点は節理面から剝離したものであり、左側辺には自然面を残している。頁岩製。

本住居址出土の石器は以上がすべてである。石器はほとんどが原礫の表皮をもったものであり、それらにわずかな加工を加えたのみの不整形な石器が数量的に主であることが理解される。



第12図　ＣＪ－１号住居址出土の石器

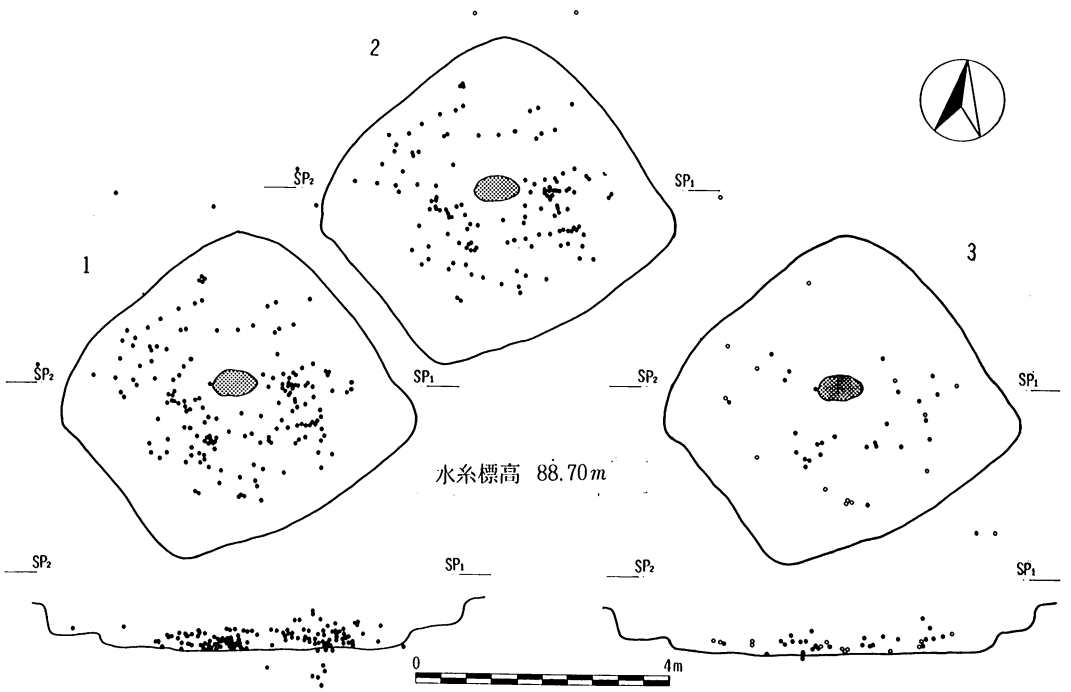
遺物の出土状態（第13図）

本遺構の遺物の出土状態をみると、まず、1はすべての遺物について示したものである。炉を中心として、平面、垂直分布とも、まんべんなく出土している状況がわかると思う。

2は、土器についてのみ示したものであるが、やはり、炉址を中心として、やや、中央よりに多く土器の分布がみとめられる。垂直分布の状況もかなり上面と下面とに分かれて観察される。

3は石、特に石器と礫についての分布の状態を示したものである。この住居址からは子供のこぶし大から大人のこぶし大程の安山岩製の円礫－特に表面が赤化してタール状の付着物がみとめられるものがほとんどである－が多くみとめられた。この礫の多くは床面よりかなり上で確認されたものである。

以上、本住居址における遺物の分布状態は炉を中心とした遺物の分布状態を把握することができよう。



第13図　ＣＪ－１号住居址遺物分布図

4）　まとめ

本遺跡からは以上、土拡１基、土器密集箇所２ヶ所、住居址１基が確認できた。

ＢＤ－１号土拡については覆土中にＢ軽石の純層の堆積を認めることができるため、構築時期はＢ軽石降下以前とすることができる。周辺にこの時期の住居址等が全く確認できなかったことを考えるなら、何か特別な意味を持った土坑としてとらえられないだろうか。

２ヵ所の土器密集ヵ所については、まず、この２ヵ所からはＳ字状口縁を持つ土器の破片を確認していることから、古墳時代前期、その中でも比較的新しい時期のものと思われる。これらの２ヵ所の土器密集部分が住居址か、あるいは、土器の一括廃棄によるものかは、今後の遺物の分布、出土状況などの詳細な検討によって明らかになるものと考える。

さて、このＳ字状口縁をもつ土器は、赤堀村以北の粕川流域においては初めての確認であり、今後、粕川村においても、この種の土器がかなり発見される可能性を示唆しており、さらに、当地方において広く認められる弥生時代後期の樽式土器、あるいは赤井戸式土器との関係を知るうえで、非常に良好な地域であることを物語ってくれた。

ＣＪ－１号住については出土遺物から縄文時代前期後半のものと思われる。この住居址の発掘を行っていく中で、同時期の住居址が、まだ周辺に存在するのではないかという予想をして試掘溝を十数ヵ所設定したが、まばらに土器の出土を見たほかは、遺構はついにこの一軒しか確認できなかった。これはもともとここに一軒しか存在しなかったのか、あるいは、他の住居址が存在していたのかは、この発掘区のすぐ西側が宅地としてかなり切り崩されているので断定しかねるが、同じ峰の県道三夜沢停車場線をはさんだ南側斜面には、かなりの量の土器片が散布しており、このことから考えるなら、今回発掘した住居址は集落における一番北端の住居址であり、そこから南西方向にかけて、集落が存在していた可能性が高い。

以上、本遺跡はその内容は貧弱であるが、この発掘調査が粕川村が主体となって行う初めての行政発掘調査であり、これから数ヵ年続けられる圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査の先駆をなすものである。

従来、遺跡立地に不向きと考えられていた北向き斜面からの遺構の確認は、マッピングの重要性を強く認識させてくれるとともに、我々の遺跡地に対する視野を拡大させてくれた。さらにこの地域で出土したＳ字状口縁を有する土器の確認は、この地域が混沌とする弥生時代から古墳時代への転換期を解明する上でも重要な地域であることを認識させてくれた。

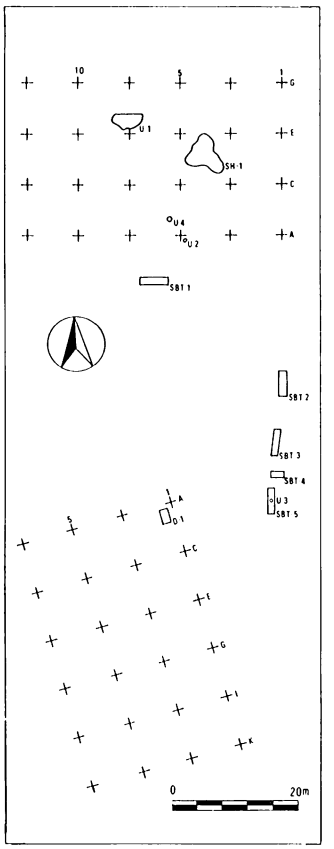
このような意味において今回の発掘は大きな意味があった。

2　室沢、安通、洞遺跡（Ａ３）

安通、洞遺跡は粕川村大字室沢字安通及び洞に所在する。粕川の左岸、標高295ｍから310ｍの所に位置する。すぐ西は粕川を隔てて宮城村へと続いている。

遺跡地は西を粕川、東を山伏川にはさまれた北から南へ延びる長い舌状台地の鞍部から東側斜面及び台地先端部、さらには舌状台地の基部に湧きでる湧水の周辺にと広い地域を占めている。遺跡地の現状は傾斜面を南に流れる小河川を使って灌漑して切り開かれた水田であり、その水田の耕作面の下、約１ｍに遺物が存在していた。

この地は東西を河川にはさまれ、粕川からの比高が高いところで約10ｍ、低いところでは３～５ｍと比較的低く、さらに川幅の狭いところでもある。そのため水害に多くみまわれた地でもある。最近では昭和22年の台風で遺跡地より３ｍほど南の地点まで水が上がって家屋数軒が流出したという。それ以前にも数回となく粕川は氾濫をくり返している。今回の発掘からもこの氾濫、水害の跡をうかがい知ることができた。



第14図　Ａ３遺構全体図

発掘地点は北より湧水周辺を第３地点、そこから500ｍほど南を第２地点、さらに南を第１地点と仮称した。以後、これら第１、第２、第３地点から確認された遺構および出土遺物について見ていこう。

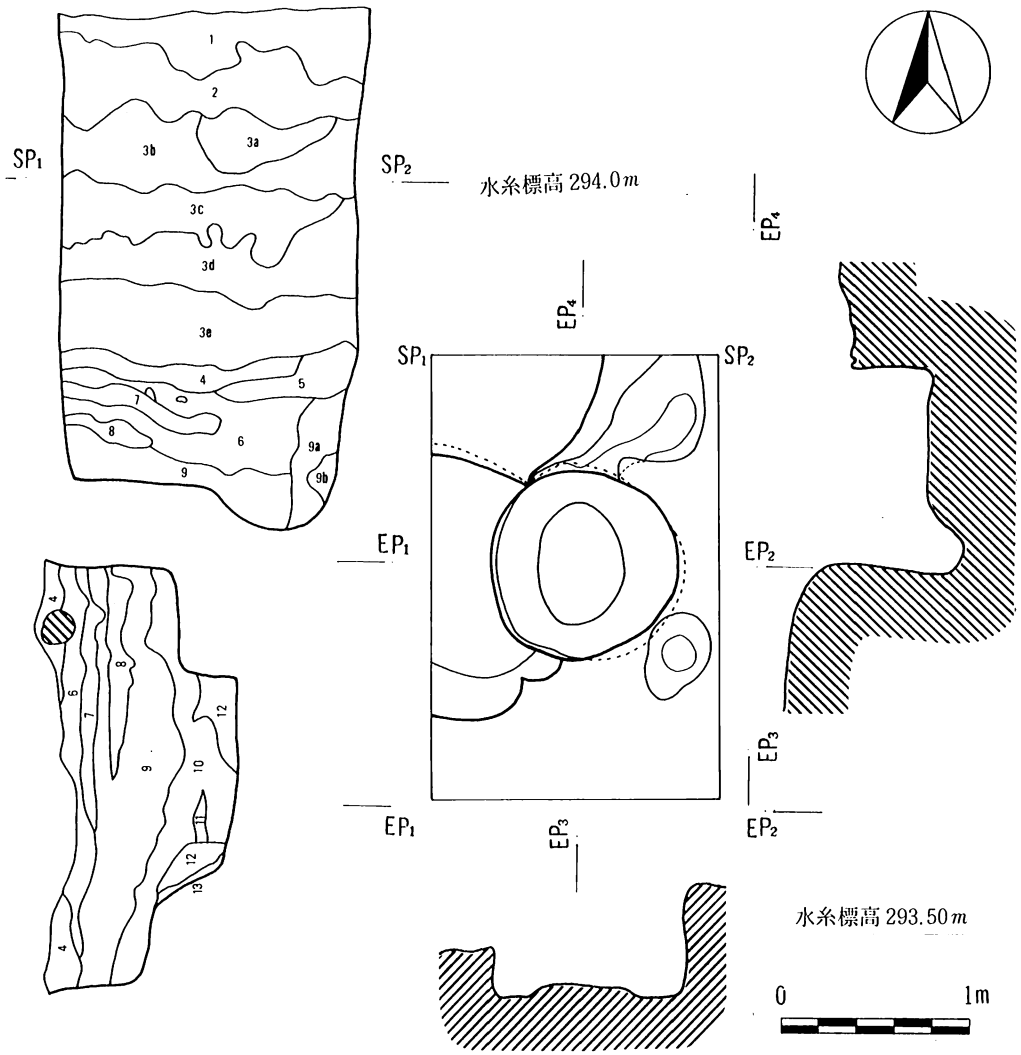
１）　**第１地点出土の遺構と遺物**（第15～19図、図版７・８・18・20）

この地点は圃場整備側の計画で土の切り盛りがあるということなので、発掘計画当初より調査の対象地点であった。これは、ここがたまたま桑畑であり遺物の散布が認められたことによるものであり、それがこの遺跡の存在を周知のものとさせた。（第14図）

１号土坑（第15図、図版７）

この遺構はａ－１区の深掘り部分で確認された。それは土層観察用に３ｍほど深掘りを試みたところである。２ｍほどの砂層の下に茶褐色土、その下にローム層と続き、このローム層を掘り込んでこの１号土坑は作られている。

土層の堆積状況は（第15図）に示すとおりであり、上層に砂質の黒色土、その下に砂層が間に大形の礫を含む砂質土層をはさんで数層にわたって堆積しており、その砂層を掘り抜いたところ



第15図　1号土坑実測図

で褐色土が現われた。この褐色土にはかなり大量のカーボン粒を含んでいたため、それを掘り下げたところ直径1m、深さは中央のやや高くなったところで30cmほどの断面フラスコ状を呈した土坑となった。

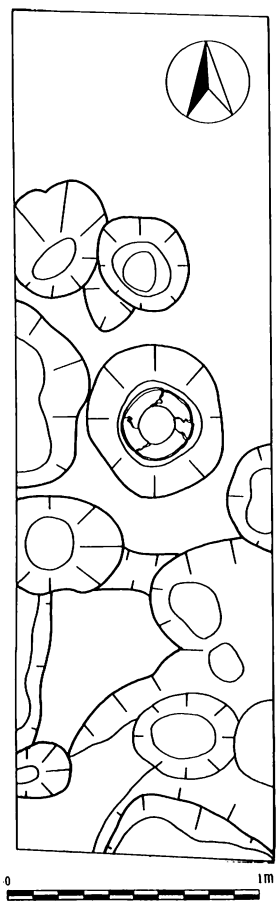
出土遺物は加曽利E式の中でも新しいものの小破片の出土をみたのみである。

この土坑の覆土の堆積状況及び3mにも及ぶ厚い砂層の下でこの土坑を確認したことを考えるなら、この土坑が埋没したのちに、かなり大規模な水害がこの地区を襲ったのではないだろうか。

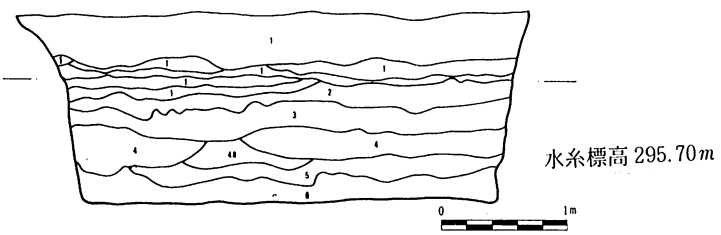
A 3 －第1地点深掘部土壌説明

第1層　耕作土。
第2層　黒色土、やや砂質の土層であるFPを含む。
第3層　白色砂層、白色の砂層であるが、分の沈着などで色調的に違いを生じている。又、下層にいくに従って粒子が荒くなり大形の礫を含むようになる。
第4層　灰褐色砂質層、下の第5、6層の影響によってやや粘性を有している。
第5層　黒褐色土、やや砂を含むがかなり粘性を有し、しまっている。カーボン粒、焼土粒を多く含む。
第6層　黒褐色土、色調的に第5層に似るがカーボン粒子の量を増す。
第7層　灰茶褐色砂質層、第4層と性質的には似る。
第8層　白色砂層、白色の砂層である。第6層がブロック状に混入している。
第9層　黒茶褐色土、粘性、しまりともよくカーボン粒子及びローム粒子を多量に含む。
第10層　明茶褐色土層、1号土拡の覆土である。ローム、ブロック、カーボン粒を多量に含む。
第11層　黄茶褐色土層、第10層に比べローム、ブロックが多く、黄色味を増す。
第12層　明黄褐色土層、第11層よりさらにロームブロックの量が多い。しかしカーボレ粒をほとんど含まない。
第13層　黄色ローム層、ローム層である。所謂三角堆土である。

図版7　1号土坑



第16図　3号埋甕平面図



第17図　3号埋甕南北セクション図

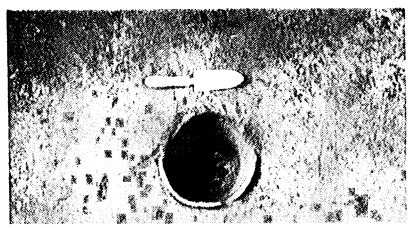
3号埋甕（第16～18図、図版8）

これは第1地点の発掘区域外でバックフォーによる土層観察用の試掘溝を設定している中で確認したものである。

遺構の確認面は（第17図）に示すように耕作土の下、約1mに堆積している黒色土が切れて純砂層に移行していくその上面で確認した。さらに埋甕のまわりを精査したところ、黒色の落ち込みが確認され、それらを掘り下げたところ不規則に並ぶPitがいくつか把握された。（第16図）

ここは発掘の区域外でもあり土糧の移動が全くない地域であるため、それ以上の拡張を行うことをとりやめた。

埋甕（第18図）は上部及び底部を欠損しているため、時期的な判断をしかねる。表面はよく磨かれており胎土に小礫を含んでいる。出土層位及び器形などから縄文中期後半から後期初頭のものであろう。



図版 8　3号埋甕

A 3 − 1　3号埋甕　Section

第1層　灰褐色土層、耕作土及び、水田の床土である。6層に細分される。
第2層　黒色土層、ｆＰを含み、やや砂質の土層である。
第3層　暗灰褐色砂層、砂層である。小礫を含む。
第4層　褐色土層、カーボン及び、パミス粒を含む。やや粘性を有し、しまりがよい。小礫を含む。
第4a層　茶褐色土層、性質的には第4層と変わりないが色調的に茶色味を増す。
第5層　暗灰白色砂礫層、しまりがなく、ざらざらした感じがある。
第6層　暗褐色土層、小礫を若干含み、粘性を若干有し、しまりは悪い。

第１地点出土の土器（第19図、図版19～20）

第１地点から確認された遺構は以上である。それらはみな砂質土層の下から確認されたものであるが、ここに示した土器はすべて耕作土直下の黒色砂質土層中より確認されたものである。この第１地点からは完形の遺物の出土は全くなく、全体の遺物の出土量も比較的少ない。

（第19図１～６、図版19）は縄文中期後半から後期初頭のものと考えられ、１は橋状把手を有し微隆起を２本配するもの、器壁はかなり風化し荒れている。色調は灰褐色。２は微隆起線を有するものである。３、４は後期初頭の称名寺式、４は堀之内式と思われる。５、６は、不規則な条痕を有するものであり、加曽利Ｂ式の粗成土器と思われる。

この第１地点出土の土器で特に目立つ存在は（９～11、13～19、23～25、図版19）の沈線を有するもので、縄文晩期後半に位置付けられるものであろう。

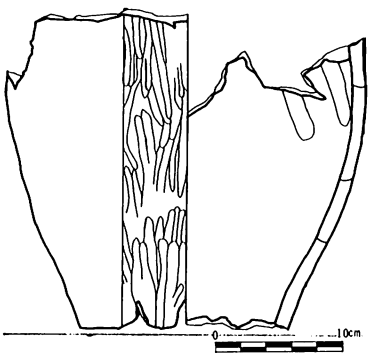
色調は、18がやや明るい褐色を呈する他はすべて黒褐色である。いずれも焼成は良好である。胎土は14、15には砂粒をやや多く含むが、他のものはすべてよく精製されて緻密なものである。

13～15は、彫りの深い沈線とその沈線にはさまれた刺突が特徴的である。大洞C_2式に平行のものであろうか。

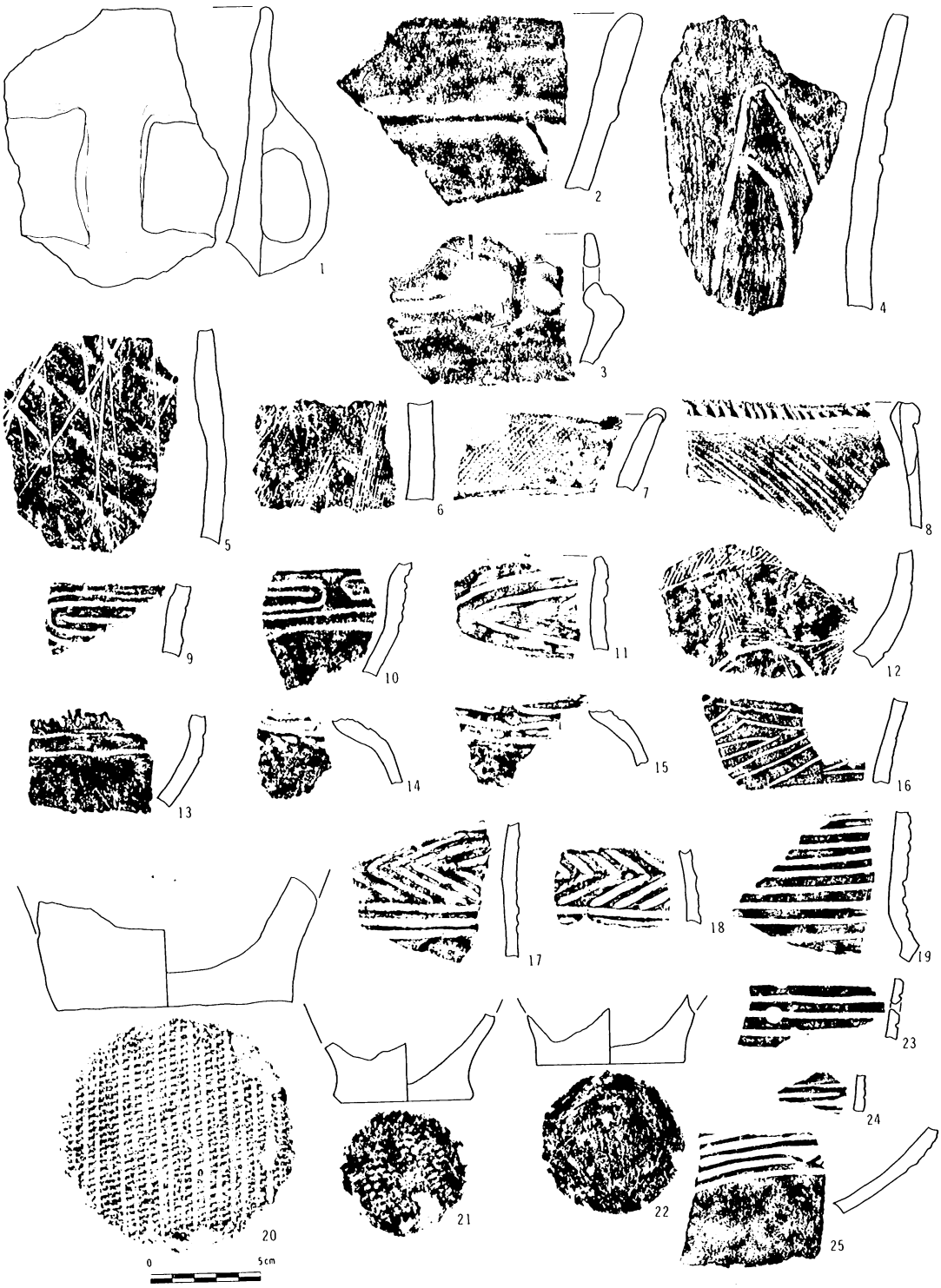
17、18はおそらくは口縁部近くの破片と思われる。口縁部に沈線による綾杉状の文様を有し、その下に２～３本の沈線を配する深鉢形の土器であろう。

19、23は彫りの深い沈線で平行沈線が数条にわたって施されているもので、大洞Ａ式土器に平行するものであろうか。

24、25は、彫刻的手法による変形工字文を有するもので、浅鉢あるいは皿に近い器形のものである。当地方特有の大洞Ａ式に平行とされる千網式土器である。



第18図　３号埋甕実測図



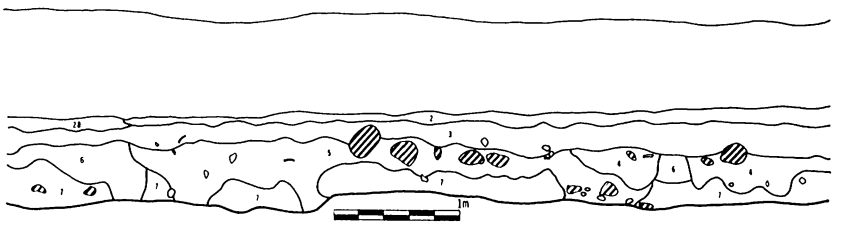
第19図　第１地点出土の土器

2）　**第2地点出土の遺構と遺物**（第20～34図、図版9～13、21～32）

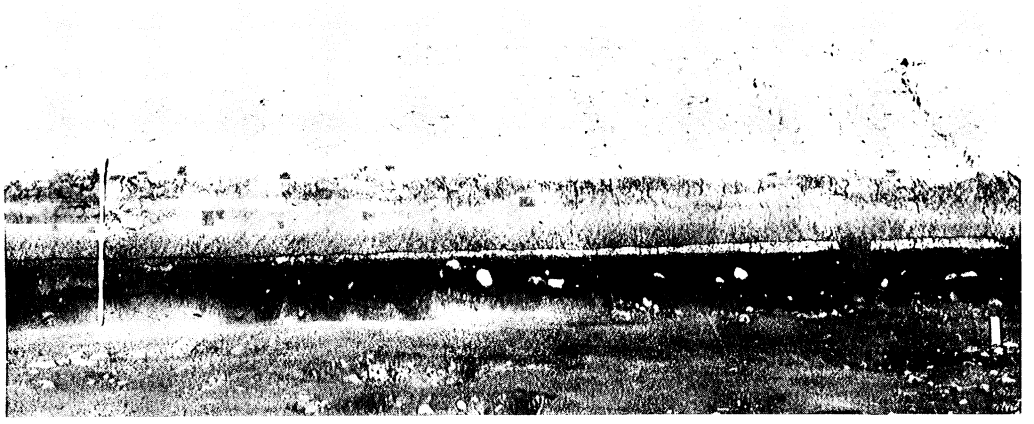
本地点は現況が水田であったため全く遺跡として周知されておらず、長い間水田の耕作面下に埋もれていた遺跡である。この地点を我々が確認できたのが土地改良によるブルドーザーが入った後のことであったため、残念なことに上面の包含層のかなりの部分が破壊を受けてしまった。

（第20図）はこの第2地点における基本的な土層断面図である。これは、第2地点北側の次に叙述する一号石組状遺構の北側土層断面図でもある。

土層は、上から水田による耕作土（第1層）、水田の床土（第2層）、黒色土層（第3層）、灰褐色土層（第4層）、茶褐色土層（第5層）、灰白色砂層（第6層以下）となり、この中で我々が観察し得たところにおいては第3層が晩期後半の包含層、第4層及び第5層が後期中葉から晩期前半の包含層、第6層に後期初頭の包含層というおよそ3つの文化層を把握し得た。しかし、晩期後半の包含層には後世のＦＰ、あるいはＣ軽石などが多く混入しているところから後世に水害などによる攪乱があったのではないかと思われる。ただ、大きく分けた後期初頭の包含層と後期後半から晩期にかけての包含層という2つの文化層の認定についてはかなり妥当性があると考えられる。しかし、この遺跡の資料は、より細かな、層位的な共伴関係などについての検討に十分答えられるような資料を残念ながら我々には与えてはくれなかった。



第20図　第2地点セクション図　　水糸標高297.60*m*



図版9　第2地点セクション

一号石組状遺構（第21～24図、図版10）

本遺構は、第４層中で確認されたものである。第２地点の北側のブルドーザーによって掻き上げられた土を排土している最中に、この石組状遺構に伴うと思われる埋甕をたまたま確認し、そこを広げたところ本遺構を確認し得たのである。しかし南側半ばは機械による破壊を受けており、埋甕もちょうど南半部の部分を破損されてしまっていた。

遺構は大きさの不揃いな円形、あるいは板状礫を用い、石のみを積み上げたような地点と、上面にのみ石が置かれている地点とで構成されている。平面形を見る限りにおいては、なんらかのかたちを意識して配列されたように認められる。

遺構を構成するものは単なる礫の他に凹石、石皿、磨石などの石器類も用いられており、この遺構の最下層からは石皿の完形品が立った状態で出土している。（図版10）又、本遺構の石を総て取り除いた下底には炭化物の集中して分布していた地点があった。（第21図）

出土遺物

本遺構と直接関係のある遺物としては（第22図）に示した埋甕が上げられる。

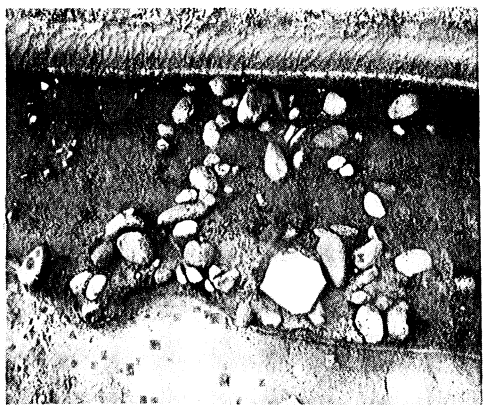
埋甕は底部を欠損したものであり、他の部分は機械による削平を受けなければほぼ完形であったと思われる。

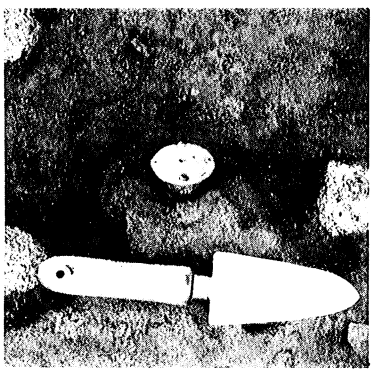
第21図　１号石組状遺構実測図(1)

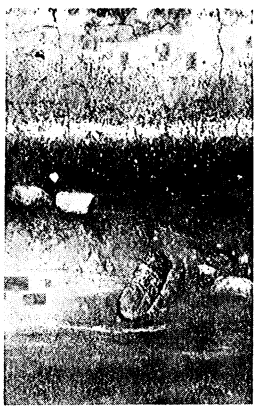
口縁の直径40㎝、胴部最大径42㎝、器高は現存高で35㎝を計る。最大径を中央よりやや口縁部よりに持ち、口縁部がやや内傾ぎみに胴の張った大形の深鉢形土器である。

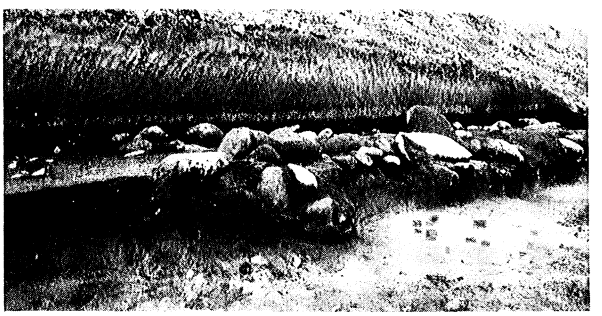
胎土はよく精製されており焼成も良好である。土器上半部の器面はよく調整されているが、下半部はほとんど調整されず、粗製土器のそれのように見うけられる。この土器は全体としては半精製の土器なのであろう。色調は黒茶褐色を呈する。

口縁部には魚尾状突起の退化したような二頭を有する突起を配する。主文様は沈線によって構







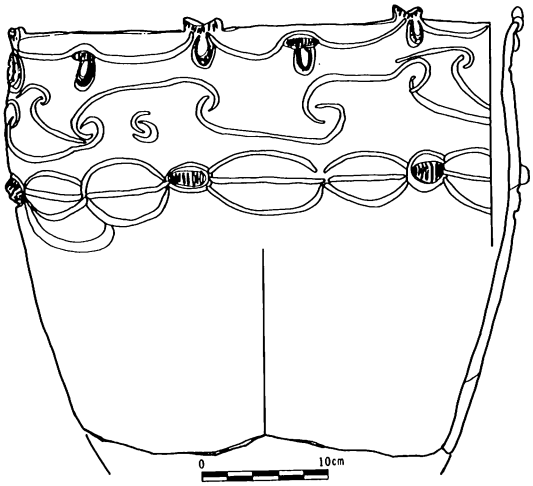


図版10　1号石組状遺構

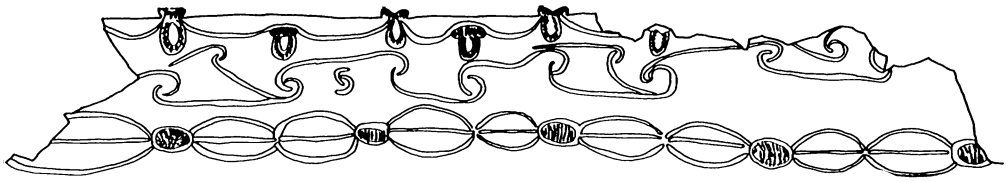
成され、それに細かな刻み目を有した粘土瘤の貼付けによる突起を配している。

土器文様の展開図（第２３図）をみると胴下半に付けられた遮光器状の２個が一単位となる文様が一部分で文様の割り付けミスが起こり、１個一単位のものが一ヶ所付けられていたようである。

この他、この一号石組状遺構からは土製耳飾、岩盤などの遺物の出土を見ている。（図版10）



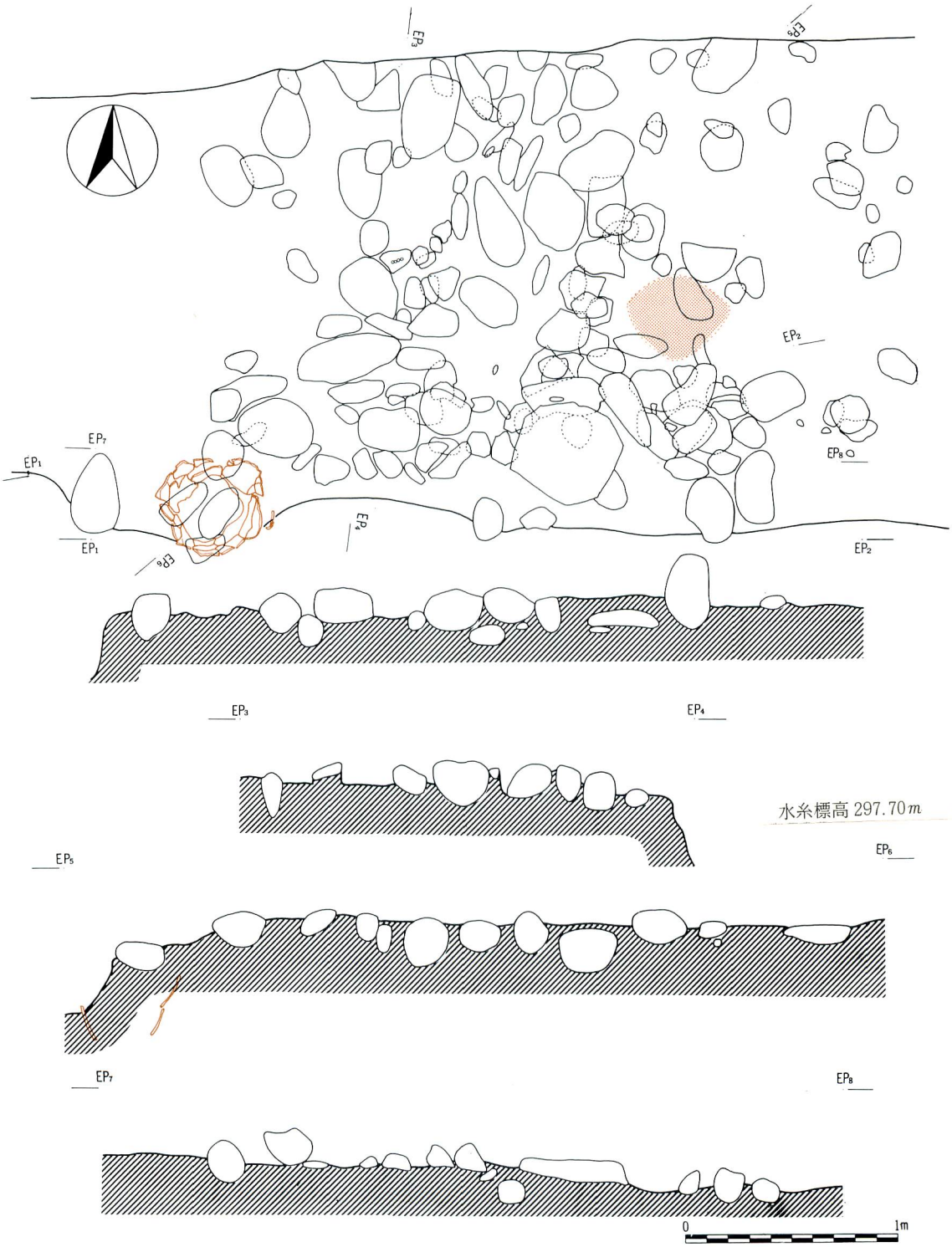
第22図　１号埋甕実測図



第23図　１号埋甕文様展開図

Ａ３－第２地点　層序説明

第１層　灰黄褐色土、水田の耕作土である。
　　鉄分の沈着などにより数層に細分される。
第２層　黄褐色土、小礫及び、パミス粒を多量に含む。しまり、粘性はなくパサパサした感じである。
第３層　暗黒褐色土、Fp及び、Ｃスコを多く含んでいる。粘性は弱くボツボツしている。
第４層　灰褐色土、含有物を全く含まない。粘性、しまり共に弱くやや砂質が強い。
第５層　茶褐色砂質土、砂質の土層であるが、固くしまっている。１号石組がのる面である。
第６層　灰褐色土層、第４層に似る。
第７層　灰白色砂層、純粋な砂層であるが、部分的に小礫を含む。



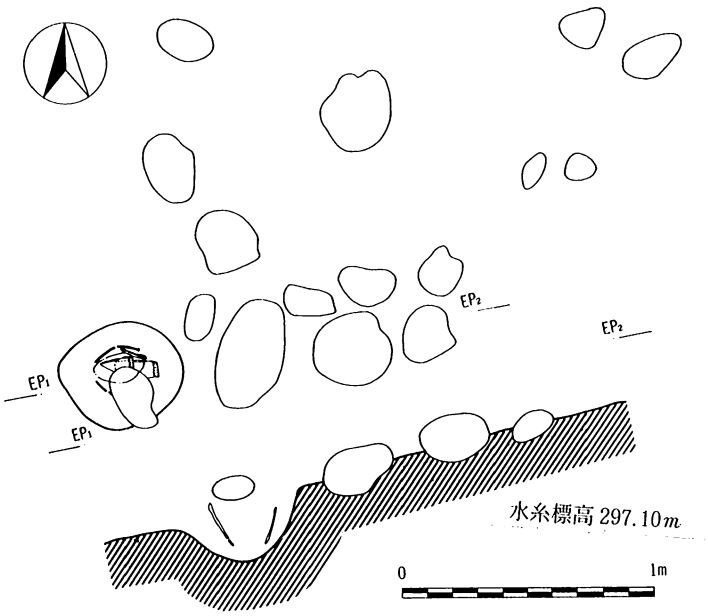
第24図　1号石組実測図

2号埋甕（第25・26図、図版11）

本遺構も第4層中より確認されたものである。一直線上に円礫を並べた列石を伴なって確認された。

石はN－80°－Eの角度で7個、平面的には同じレベルで直線的に並べられており、一番西端の石下で、その石にフタをされたような形で埋甕が確認された。

埋甕は、全く文様の異った2個体の粗製深鉢形土器の大形口縁部破片を用いて一個体分の埋甕をかたち作っていた。



第24図　2号埋甕平面実測図

埋甕に使用された土器はいずれも胎土に小礫を含んだ粗製のもので、器面もほとんど調整されていないものである。色調はいずれも灰褐色を呈している。

いずれも口縁部が肥厚するもので、1は器高、現存で約32cm、口縁部直径約27cm、胴部最大直径28cmを計るものである。器形は、口縁部はやや内湾するものである。2は器高約24cm、口縁部直径28cmを計り口縁が直線的に開く深鉢形土器である。

文様は、1は口縁部に角ばったヘラ状工具による横方向からの刺突が2段にわたって施されている。2は沈線による入組文が施されている。これらの文様から、これらの土器は安行3b式土器平行のものと考えられる。

4号埋甕（第27・28図、図版12）

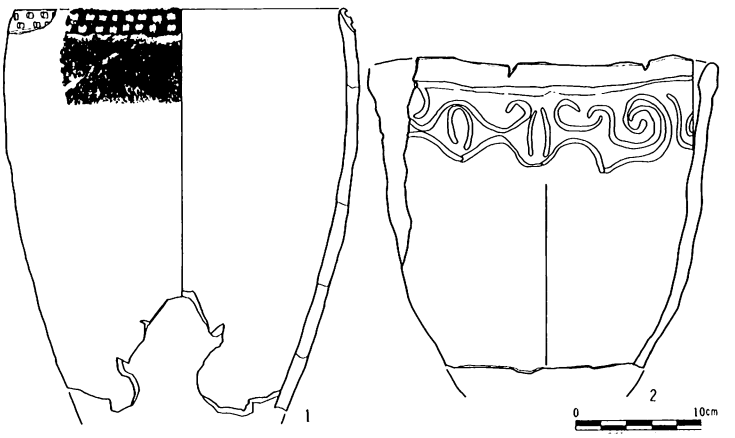
本遺構も前述してきた遺構と同様に第4層中での確認である。やはり石を伴うものである。しかし本遺構のものは前述のものとは異なり盤状の石を用いたものであり、あたかも土器に蓋をしたような状態で出土している。

土器は口縁部の一部をわずかに欠損しているが他は全くの完形である。

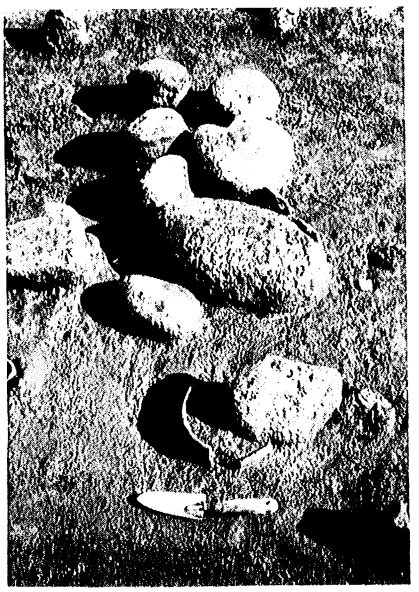
口縁部直径40cm、胴部直径33cm、器高45cmを計るものであり、大形の深鉢形土器である。胎土にはわずかに小礫を含み、器面の調整も悪い粗製土器である。色調は暗茶褐色を呈する。

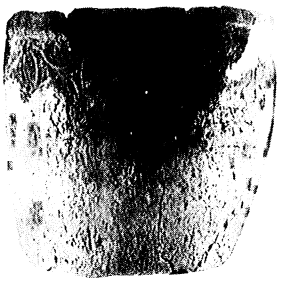
器形は口縁部が大きく開き、胴中央部で極端にすぼまり、小さな底部へと続いている。底部には網代等はつけられずヘラ状工具により調整されている。

文様は口縁部に、まん中に円孔を有する粘土瘤の貼り付け文が3組付けられている。1組は縦に粘土瘤を3個



第26図　2号埋甕実測図

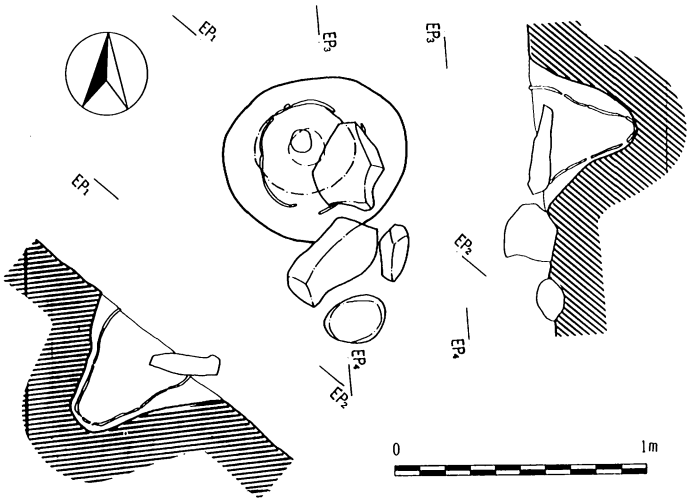




図版11　2号埋甕

貼り付け、そこからそれぞれ沈線を3本横方向に延ばしている。他の2組は縦方向に2個の粘土瘤の貼り付けがつけられているが沈線はそれにつけられず、先の1組からのびる沈線もそれらには達していない。

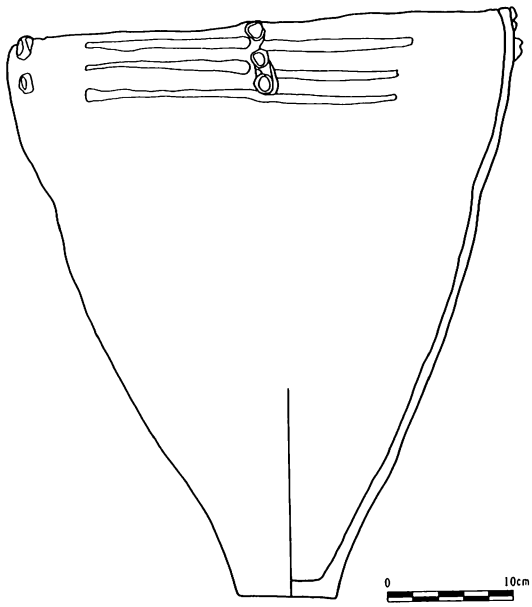
この土器については、文様は全く土器全体を無視したかのように割り付けられており、一般的な文様の割り付けと違った施文がなされているように思われる。



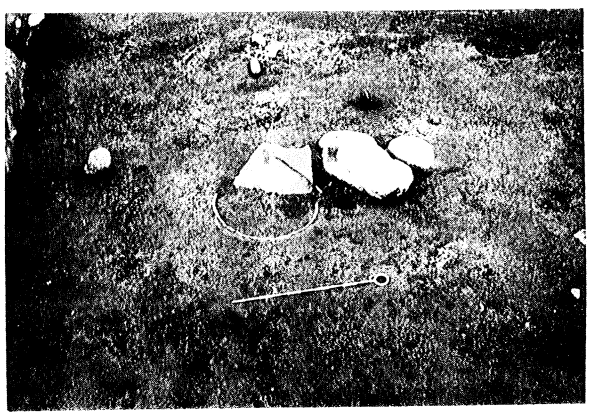
第27図　4 号埋甕平面実測図

水糸標高 296.935*m*

第28図　4 号埋甕実測図



図版12　4 号埋甕



1号敷石住居址（第29図、図版13）

本遺構は第6層の灰色砂層の上面で確認されたものである。五角形状の主体部に方形の張り出し部をもった所謂柄鏡形の敷石住居址である。

この住居址に付随する施設として、壁及び炉址、埋甕などは確認されず、わずかに敷石の石をはがした段階で柱穴状の浅いPitを3個検出したのみである。

最大長6.30m、短軸長5.0m、張り出し部の長軸長2.50m、短軸長1.9mを計る。

張り出し部分は立石で構成され、その中でも張り出し部の先端部分には石皿をもちいている。

主体部は一般的な敷石住居と同様に扁平な礫が用いられている。ただ、この主体部の北側隅などの石は石を抜かれた痕跡がみとめられ、後世においての攪乱を受けたものと思われる。

出土遺物（第30図　16～24、第31図28～31、図版21～33）

本遺構からの出土遺物はいずれも縄文時代後期初頭のもので、所謂称名寺式土器の範疇に入るものである。

第2地点出土の土器（第30～34図、図版21～28）

本地点出土の土器は、表採等の資料も含めると膨大な量に達する。しかしそのほとんどが文様を有しない粗製のものばかりである。ここでは、文様を有するおもな土器について見ていきたい。

本地点の出土土器は、およそ縄文時代中期後半から晩期後半のものを含んでいるが、その主体となるものは、晩期の資料であろう。以下、それぞれ時期別に出土土器を見ていこう。

縄文時代中期後半の土器（第30図1～14、図版21上）

縄文時代中期後半の土器を一括した。

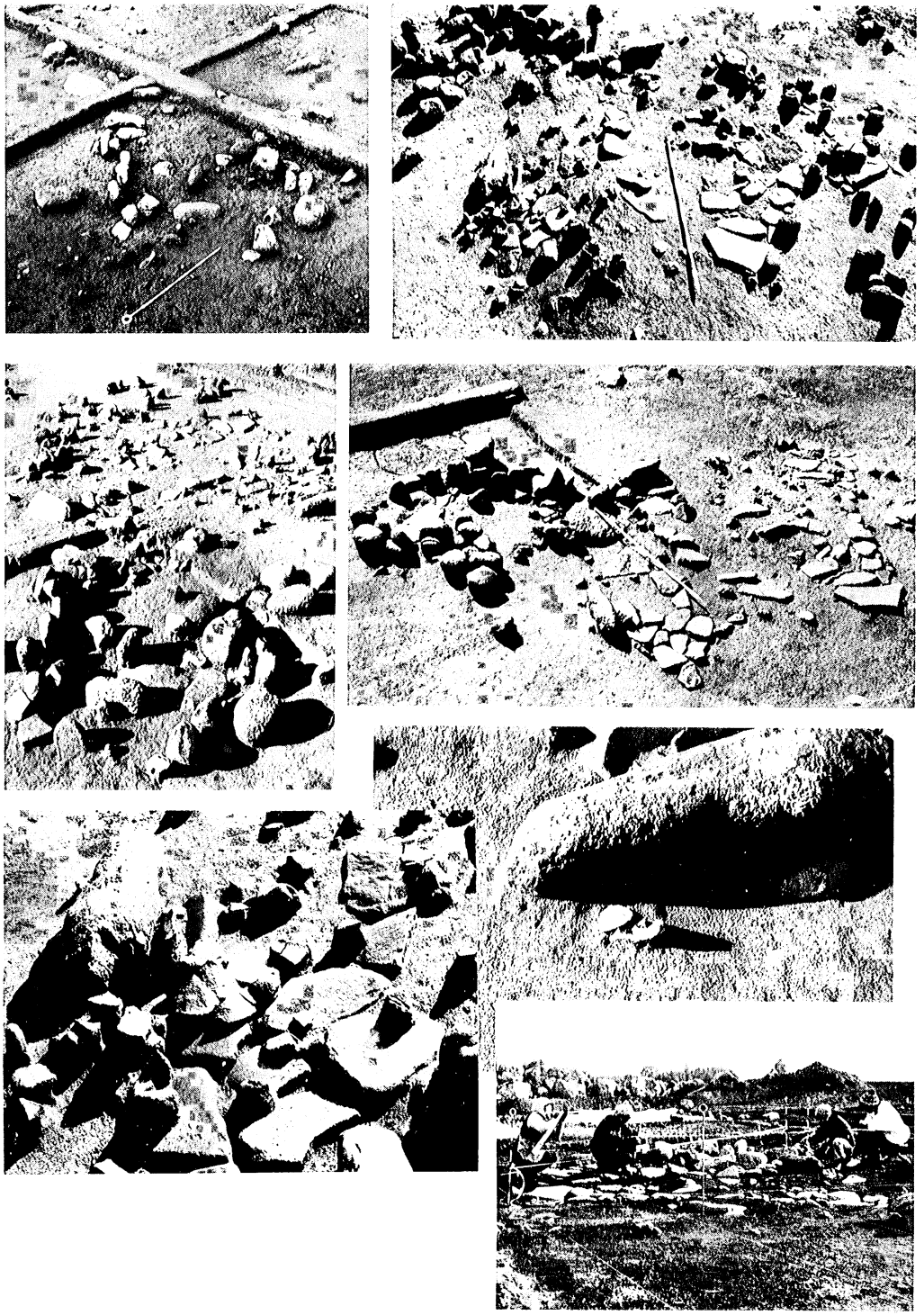
沈線による渦巻文や懸垂文等を有するものや、口縁部における円形の刺突文を有するも（2、3、5、9、10）櫛状工具によるハケ目を有するもの（4、6、13）、微隆起線文を有するもの（6、7、8、11、12）の3つに区分される。いずれも、縄文時代中期後半の加曽利E3式、あるいは、E4式に比定されるものであろう。

胎土には、小砂粒を含むもの（1、3、6、8、10、11、14）と、石英粒を含むもの（7、12）がある。色調は、(1)のみ赤褐色、（2、5、7、9、11、12）は黄褐色、（3、4、6、10、13）は灰褐色、（8、14）は黒褐色を呈する。

縄文を有するものでは、（2、5、7、8、9、12、14）がLR、（10、11）がRLの縄文を施文している。

以上のものは、表採及び第6層中より確認されたものがほとんどである。

第29図　1号敷石住居址平面実測図



図版13　1 号敷石住居址

縄文時代後期初頭の土器（第30図15～26、第31図27～31、第32図32～38、図版21下～23）

（16～26、31）は沈線による区割文を有するもので、（16～20、25～26）はその区割文の中にヘラ状工具の刺突による列点文が施されている。

（15）は4本歯の櫛状工具による刺突が施されたもので、これは中期後半の土器であるかも知れない。

（21～24、31）は沈線のみで文様が表現されるものである。

（31）は、これらの中で唯一器形のわかるものであるが、口縁部と底部を欠損している。多分、口縁部直下で小さくくびれを持つ小形の深鉢形土器であろう。

これらはいずれも縄文時代後期初頭の称名寺式土器に比定されるものである。なお、これらは前述したように、1号敷石住居直上で確認されたものが多い。

（27～32）は把手である。

（32～34、38）は、堀之内1式土器であろう。

（37）は、口唇部における突起とそれにつづいて垂下する指頭による圧痕が施された太い隆起が特徴的である。胴部には太い一段Lの縄文が施されている。東北地方に分布圏をもつ土器であろうか。

（35、36）は紐線文を有するもので、（35）は一段Lの縄文が施されている。これらの後期中葉の加曽利B式土器の粗製土器であろう。

これらの土器については、（35、36）は砂粒を多く含み焼成も悪いほかは、すべて胎土もよく精製され内外面共によく磨かれている。

色調は（16、18、19、20、23、28、30）が黒褐色、他は灰褐色を呈する。

縄文後期後半の土器（32図39～50、図版24）

ここでは安行1式、あるいは2式のものを一括した。

（39～44、46～50）は帯縄文を有するもので、それぞれ粘土瘤の貼り付けによる突起を有している。（39、41～43、47）は平縁の深鉢形土器、（44、45、46、50）は波状口縁を有する深鉢形土器である。（40）は浅鉢、あるいは注口土器であろう。

（45、48、49）は地文として縄文を有せず明確に時代決定はし難い。

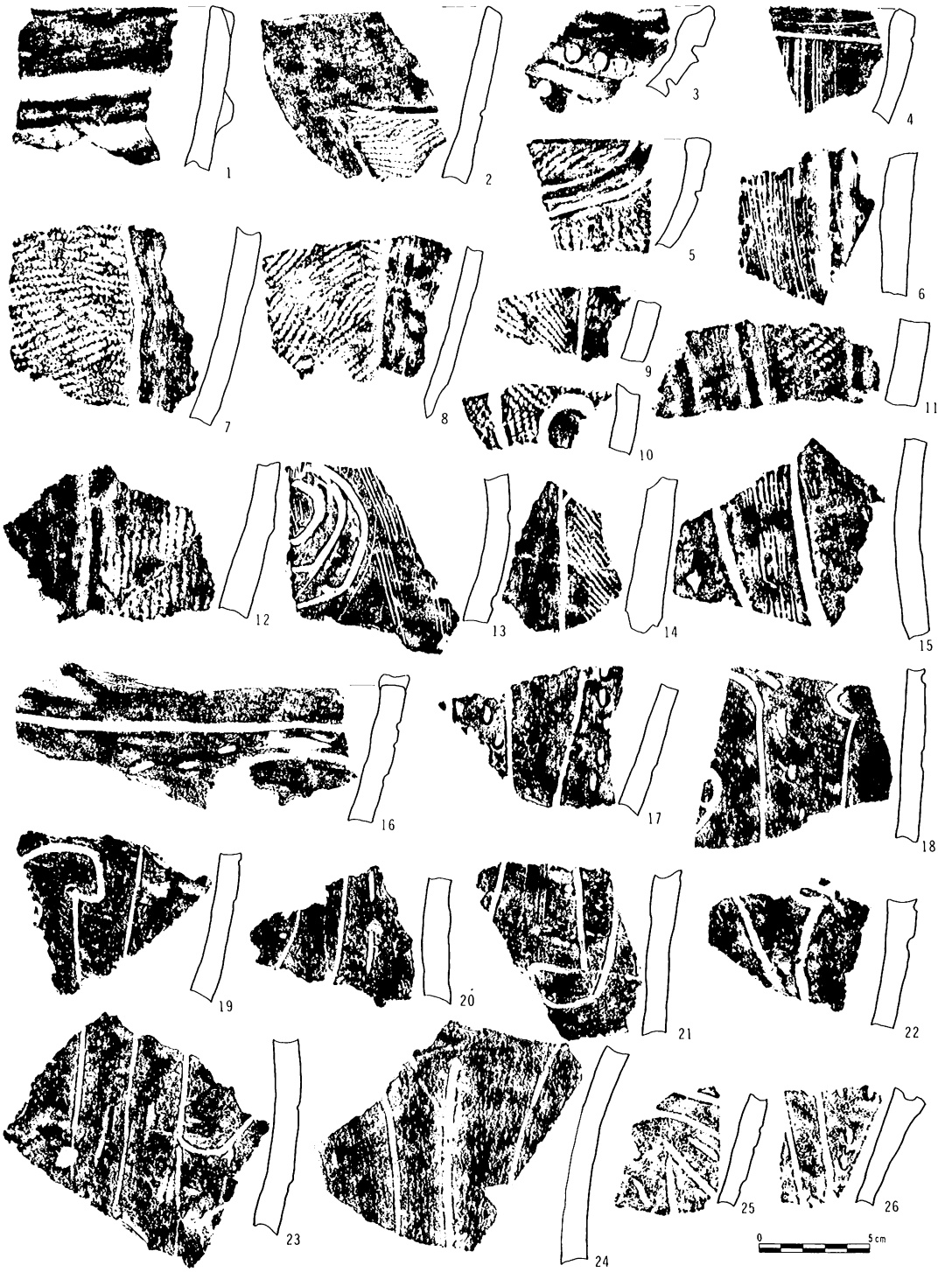
胎土としては（39、44、48、49）には砂粒を含む。

色調は（46）のみ赤褐色、他はすべて黒褐色を呈する。

縄文は（43、49、50）がRL、他はすべてLRである。

縄文時代後期後半から晩期初頭の土器（第33図51～87、図版25、26、上）

ここに特徴的な文様は沈線による直線、あるいは曲線による幾何学様の文様と磨り消し縄文、



第30図　第２地点出土の土器

第31図　第２地区出土の土器（２）

それに粘土瘤の貼り付けによる突起である。これらは安行３a式から３b式土器に比定されるものである。

（81、83、86、87）は同一個体の土器であるが、縄文を有せず沈線と粘土瘤の貼り付けのみで文様が構成されている。これらは東北地方後期後半のものに比定されようか。

（51）は口縁部にＬＲの縄文、その下に雷文あるいはコの字重ね風の文様を有するものであり、東海地方から中部地方にかけて分布する一群の土器に対比されるものであろうか。

以上の土器はいずれも、胎土は精製され、器面も表裏共によく磨かれている。

第32図　第２地区出土の土器（３）

色調は（52、53、54、55、56、57、60、64、66、68、71、77、79）が灰褐色から赤褐色、他はすべて黒褐色を呈する。

縄文は、（56、57、62）のみＲＬ、他はすべてＬＲの縄文をもつ。

出土層位は第４層から第５層にかけてである。

縄文時代晩期の土器（第34図88～139、図版27～28上）

ここには、安行3b式、あるいは姥山Ⅱ式、千網式、その他東北地方の大洞Ｂ－Ｃ～C_2式土器を含むものを一括した。

（94～98、100、103）は、口唇部に２頭を有する突起をもつ波状口縁を有する土器であり、（103）のみ一段Ｒの縄文、他はすべてＬＲの縄文が施文されている。これらは姥山Ⅱ式土器とされたものである。

（99）は、文様的には似ているが上記のものと異なり、縄文のかわりにハケ状工具による条痕文が区割の中に充塡されている。

又、ここにはヘラ状工具による刺突文、あるいは列点文を有する土器が顕著である。

（88、89、91、101、102、104、109）これらは大型のヘラ状工具による、規則性をもった斜方向からの刺突が行なわれたもの（88、91、101）と小さな不規則な、真上からの刺突による列点を有したもの（102、104、105、109）とに分けられる。特に後者には、三又状文も顕著に認められる。

（89）はＬＲの縄文と刺突文が並用されているものである。

（113、116～121、123～130、134、135）は大洞Ｂ－Ｃ式、あるいは、C_2式に比定される土器であろう。

（131～133、136～139）は、所謂工字文を有する一群の土器であり、当地方における晩期後半の千網式土器に比定されるものである。

（133）は赤色塗彩が施されている。

（90～93、111、114、115、122）は粗製土器の一群である。いずれも口縁部が折り返し様の口縁をもつものである。

（111、115、122）は撚糸文を器面全体に施したもので、大洞C_2式から以後に出現してくるものとされている。

（90、92、93、107、112、114）には胎土に砂粒が含まれている。

色調は、（88、91、97、99、101、102、108、111、115、117、123、124、126、127）が赤褐色あるいは灰褐色、他はすべて黒褐色である。

第33図　第２地点出土の土器（４）

第34図　第２地点出土の土器（５）

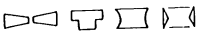
第2地点出土の石器及び特殊遺物（図版28下～34）

第2地点からは縄文時代後期後半から晩期初頭にかけて特徴的な特殊な土製器や石製品が出土している。

（図版28下）はミニチュア土器及び、粘土塊をそのまま焼き上げたようなもの、あるいは土製円盤等を示した。

ミニチュア土器は、口縁部から垂下する隆線を有するもので、胴部に穴があけられているところから注口土器であろう。色調は黄褐色を呈する。

（図版29上）は、注口土器の注口部分である。左端のものは赤色塗彩が施されている。

（図版30～31）は、耳飾を一括した。耳飾にもさまざまな形があり断面形が  の4つに分けられる。又、彫刻が施されたもの、あるいは耳飾中央にブリッジを有したものなども見られる。

（図版32上）は、第2地点出土の石鏃である。まだ水洗がすべて終了していないので、さらに石鏃の数は増すだろう。石鏃にも大型でつくりの雑なもの、小型で精巧なものの2者に区分できる。

（同図32下）は、第2地点と第3地点との石鏃の量を比較したものである。土器の量は2地点ともさほど出土量としてはかわりがないが、石鏃の量には明らかに違いを生じている。

（図版33）は、石斧を一括した。大型の鍬形石斧などもみられる。この遺跡全体としては石斧の出土量は少なく、ここに掲載したものがほぼすべてである。

（図版34）は、特殊な石器を一括した。左端の2点はいずれも周縁が磨かれ、断面形が凸レンズ状をなしている。中央のものは真中に断面がU字状の溝を有するもので石棒の頭部の破片であろう。左端の2点は石錘である。

この他、第2地点からは、当地方では産出しない変成岩を用いた石棒などの出土も見ている。

（図版29下）は、砂岩系の石を用いた岩版である。表面にのみ渦巻状の文様が彫刻されている。安行3aあるいは安行3bに伴なうものであろう。1号石組状遺構の周辺から出土している。

3） **第3地点出土の遺物**（第35～39図、図版35～44）

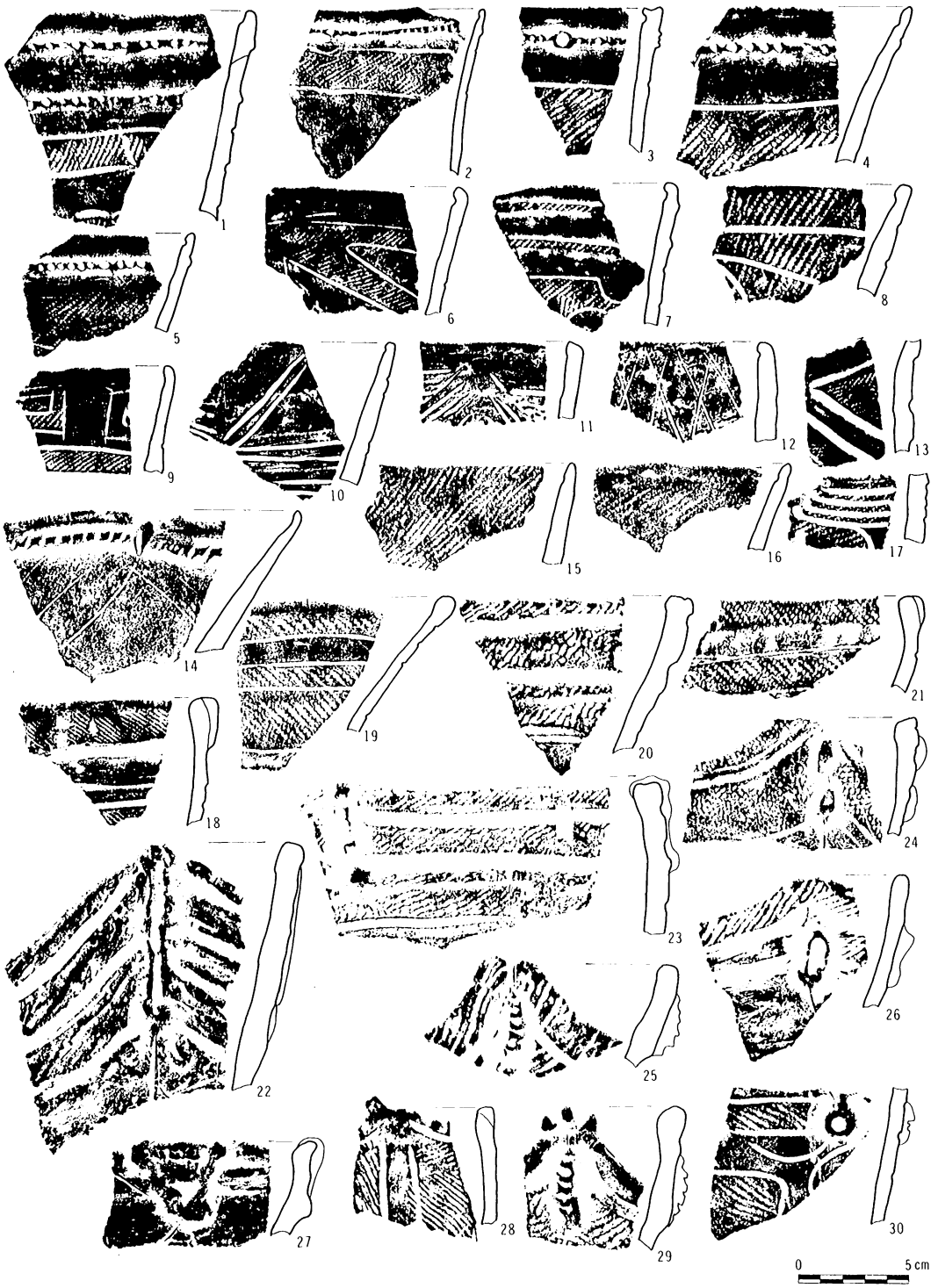
第3地点は第2地点の北方約500ｍのところにある。赤城山南麓における地形の変化するところに位置している。ちょうど、この地点から地形の傾斜が急に変るのである。そのため、この遺跡の存在する北側と南側とでは2～3ｍの段差を生じている。赤城山南麓ではこの地形の変化点にはしばしば遺跡が発見されている。それは、この地形の変化点には必ずと言っていいほど湧水を伴うからかもしれない。

この第3地点もその例に漏れず、湧水をもっている。遺跡は、湧水の南側半径50ｍ程の範囲の中でのみ発見されている。発見された遺物の量は発掘した全面積に比べて膨大なものである。しかしそのほとんどが粗製の土器であり、文様をもったものは全体の2割にも充たない。出土土器は縄文時代後期初頭から晩期中葉にかけてのものである。

この第3地点は遺物の量は膨大であるが、層位的にはまったく恵まれず、30cm程の遺物の包含層の下はすぐ厚い砂礫層になってしまい、遺物の出土状態も土器が折り重って出土したような状態であった。

又、遺構についても、まったく検出できなかった。

図版14　第3地点



第35図　第３地点出土の土器（１）

第36図　第３地点出土の土器（２）

第37図　第３地点出土の土器（３）

それでは以下、第３地点出土の遺物について見ていこう。

（第35図、図版35・36上）

縄文時代後期初頭の堀之内式土器、あるいは後期中葉の加曽利Ｂ式土器、安行１式土器をまとめたものである。ただ（22、27～30）については型式不明である。

（20、22、23、27）の胎土には砂粒を多く含んでいる。他は内外面ともに磨かれている。（２、３、12のみ黒褐色、他は赤褐色及び灰褐色を呈する。

（第36図、図版39・40）

後期後半から晩期初頭のものである。

安行２式土器から安行3a式土器にかけてのものと思われる。

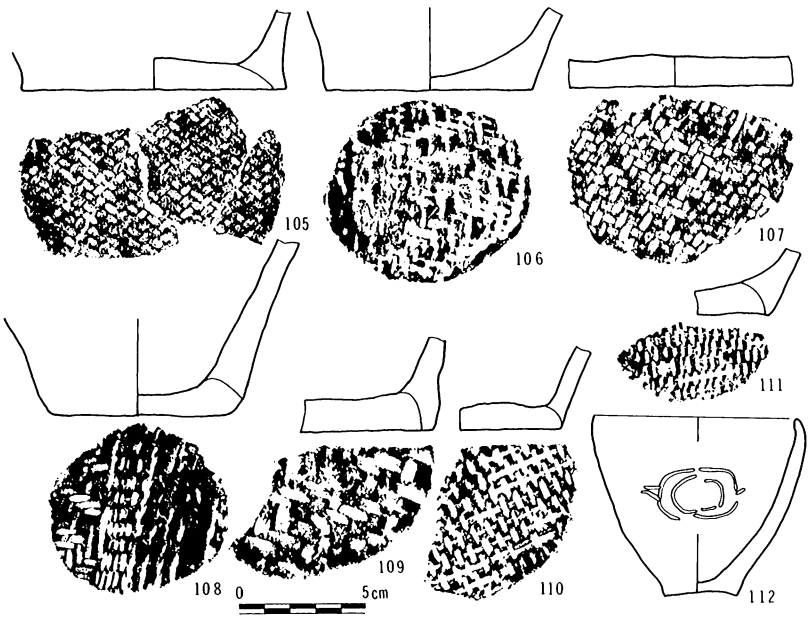
（31～45）は、魚尾状突起と帯縄文、それに粘土瘤の貼り付けによるブタ鼻状の突起をつけたものである。これらは大きな波状口縁をもった深鉢形土器であろう。

（46～48）は、沈線によって波状の曲線が描かれたものであり、その中に粘土瘤の貼付文が付けられている。

第38図　第３地点出土の土器（４）

（49～57）は、沈線と太目のヘラ状工具による連続刺突文によって文様が構成されている。これらの文様は、東北地方に分布する後期後半の土器の文様と共通するものである。

以上の土器にはほとんど砂粒を含んでいるが、上半部のもので(31)のみ器面が荒れている。他は、内外面共によく磨かれている。



第39図　第３地点出土の土器（５）

下半部の一群の土器はあまり丁寧に調整がなされず、内外面共に砂粒がうきでている。

色調は（32、34、38、39、40、44、49、50、51、55）が、黒褐色、他は灰褐色及び赤褐色を呈する。

（第37図80～87、図版36下～38）

これらの土器については所属時期が不明のものである。いずれも粗製土器である。

これらの土器に特徴的なものは、隆帯上に刻み目をもったものと、刻み目を有する粘土瘤の貼付け文である。これらの文様からすると、一応安行2式から安行３a式に伴う粗製土器であろうか。

（88～91）は、矢羽状の沈線をもつ安行３a 式に伴う粗製土器である。

色調は（72）の黒褐色、他は灰褐色を呈する。

いずれも胎土には砂粒を含んでおり調整の状態も悪い。

（第38図93～104、図版41）

これらは縄文時代晩期初頭、安行3a式、あるいは安行3b式土器に対比されるものである。

（97、99）は、浅鉢である。

（97）は、地文として細かい一段Ｌの縄文を施し、その上に彫りの深い沈線による磨り消し入縄文を配したもので安行3b 式土器に対比されよう。

(103)は、胴部にＬＲの縄文を有し、口唇部には３頭に分かれた突起を有するものである。文様は三又文と渦巻文によって構成されている。安行3b式土器に比定されるものであろう。

(101、102、104) は、折り返し状口縁を有するもので口縁部及び胴部に撚糸文を施したもの である。

(101) は、細かい波状の口縁を有するもので、口縁部にのみＬＲの撚糸文が施されている。

(102) は、平縁のもので、やはりＬＲの撚糸文が口縁部にのみ施されている。

(104) は、胴部破片であるがＬＲの撚糸文が一面に施されている。

これらの一群の土器は、この第３地点出土の遺物群から考えて、晩期前半の安行3b式土器に伴うものであろうか。

(73～74、96、98、101、102、104) は、粗製土器であり、砂粒を多く含んでいる。他は、内外面共によく磨かれている。

(第39図、図版42)

第３地点出土の土器の底部と小型土器を示したものである。土器の底部には網代痕をもったものがある。

(105)は、２本越え、２本潜り、１本送りの網代。

(106、107)も、同様のものである。ただ (106)は、網代の端が圧されたものである。

(108) は、２種類の網代が圧されたものである。

(110) は、２本越え、１本潜り、１本送りのものである。

(112) は、第３地点唯一の完形土器である。口径8.3㎝、器高８㎝を測る。やや口縁の内湾する小型の深鉢形土器である。

文様は沈線による、一単位のみの文様が施されている。

胎土には砂粒を含み、色調は灰褐色である。

第３地点出土の特殊土製品 (図版43、44)

(図版43左) は、土版状のものであり、完形品である。縦方向に４対の突起と２孔を有し、横方向には２対の突起を配している。裏面には文様はつけられていない。あるいは土偶の簡素化したものであろうか。

(同上中央) は土偶の脚の部分であると思われるものである。

Ａ３全体を通して、これが唯一の土偶であろう。不思議なことに、今回発掘出土遺物の中には全くといっていいほど土偶をみつけることができなかった。

(同上左) は土製円盤である。上のものは赤色塗彩がなされている。

(図版44) は耳飾を一括した。安行3b式土器に伴なうものであろう。

４） まとめ

安通、洞遺跡からは縄文時代中期後半から晩期後半にかけての多くの遺物を出土した。これら

の遺物－特に晩期前半から後半にかけてのまとまった一群の土器－の確認は、当地方においては勢多郡誌などに散見する断片的な資料を除いては初めてのことであり、遺跡の立地をみても、近隣の同時代遺跡と比べてかなり相違したところに存在している。これらを当遺跡の発見による第1の成果として上げておこう。

又、出土遺物についてみるなら、まず、後期中葉の加曽利B式土器が量的に少ないことがあげられる。これは本遺跡から南方約1㎞の宮城村馬場の矢次遺跡において加曽利B式土器が多く確認されていることと何か関係があるのかもしれない。

さらに、安通、洞遺跡では3地点で発掘調査も行ったが、それぞれに出土遺物に時期的な相違がみとめられるということである。

第1地点では晩期後葉の土器の存在が目立つ。第2地点では中期後葉から後期初頭称名寺式土器までは多く確認され、文化層を把握されているが、堀之内II式以後、加曽利B式の土器はまれであり、この時期空白の時期がある。そして晩期前半から後半にかけては遺物の量が増大することから、ここにこの地点における一つの文化的ピークがあったらしいことがうかがえる。

第3地点では、中期の土器は全く見あたらず、後期も堀之内II式から大量に土器の出土を見ている。しかし加曽利B期には第2地点同様その遺物等は少なくなってくる。そして後期後半から晩期中葉にかけて、第3地点における一つの文化的ピークをむかえるのである。

つまり、出土遺物について見れば、中期後半から後期初頭称名寺期頃は、第2地点付近にこの遺跡の中心があり、これが、堀之内II式期には第3地点に移り、加曽利B期になると、この遺跡全体が一時衰退するのである。

そして後期後半から晩期中葉にかけては再びこの遺跡がにぎやかになり、第1～第3地点までまんべんなく遺物が確認されるところから、この遺跡全体の発展期がこの時期にあったものと思われる。これ以後晩期後半にかけては、第1、第2地点に中心が再び移るが、その発見される遺物量は少なくなってしまうのである。

すなわち、第2地点から第3地点へ、そしてこの遺跡全体に、さらに、再び第2地点へという人間の移動が推定されてくるのである。

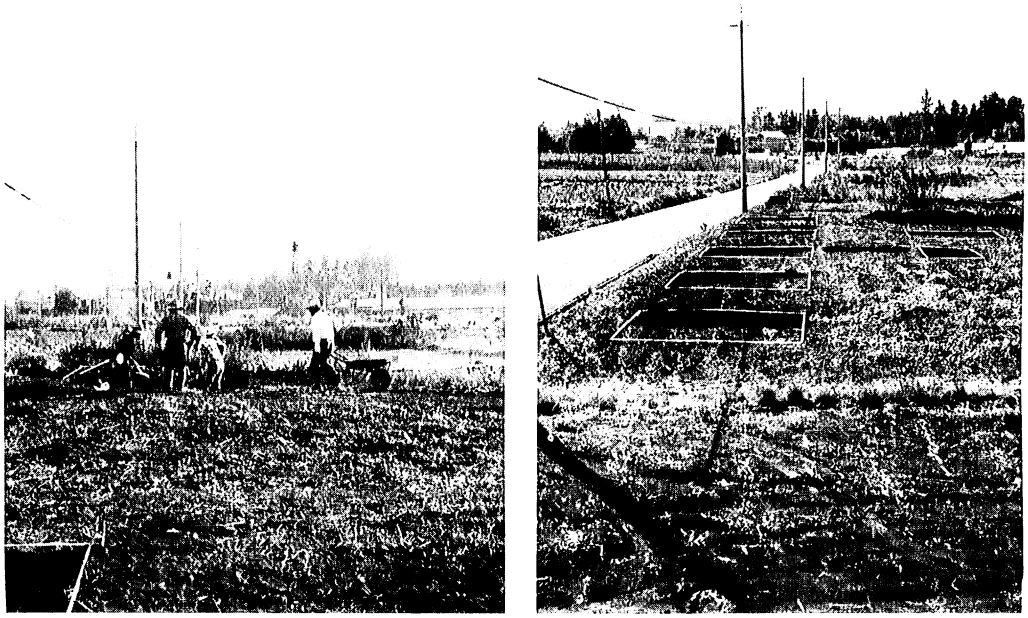
まだ整理が十分でない状態での仮説であるが、上記のことについて第2の成果として上げておきたい。

第3の成果としては、水田下約1ｍでこの遺跡が発見されたことにより、水田にも我々の目を向けさせたということである。

第4点として、本遺跡には明確に自然災害のあとを把握したことである。

縄文時代中期末から後期初頭に移るそのあいだに大水害がこの遺跡をおそったことがうかがえる。粕川における水害史の歴史がさらに一時代さかのぼったのである。

以上をもって安通、洞遺跡のまとめとしたい。この遺跡からの出土遺物は膨大なものであり、遺物の検討などは十分なものではない。これから以後、整理が進行するに従って、さらに多くのことを我々に明らかにしてくれると思う。



粕川８号墳発掘風景

Ⅳ　昭和54年度における埋蔵文化財発掘調査の総括

本報告の昭和54年度は年度途中からの緊急発掘調査であった。そのため、我々教育委員会側は常に後手後手にまわり、土地改良側にふりまわされる形となった。

しかし今まで見てきたように、本年度の発掘調査では、粕川地区における初めてのＳ字状口縁を有する一群の土器の確認、縄文時代晩期のまとまった資料の確認など、大きな成果をおさめるとともに、これから以後の本地域における埋蔵文化財の発掘調査に対しての一つの指針を確実に我々に与えてくれた。

しかし、反面、純農業地帯の中で、村の総力を上げて取りかかっている土地改良事業、農業の体質改善という大義名分のもとに行なわれるこの事業の前に文化財保護ということの無力さを実感した一年であった。

我々は、この昭和54年度における苦い経験を一つの踏み台として、今後５年以上続くと見られる土地改良事業に対処していかなければならないと考えている。

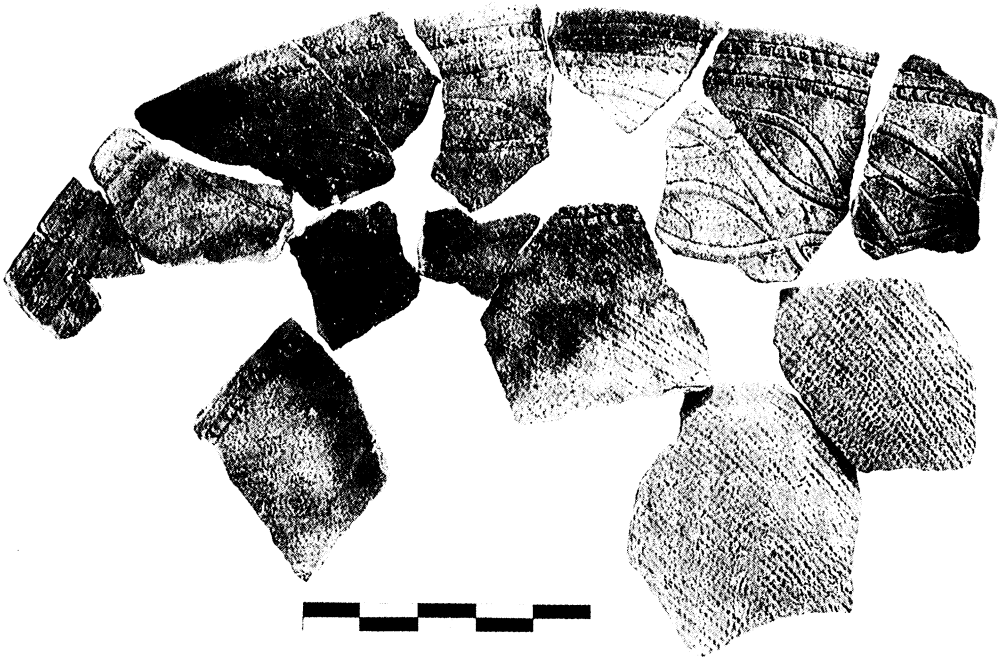
赤城南麓における遺跡の宝庫である当地方の遺跡をみすみすこのまま死滅させるわけにはいかない。

現在連日続く発掘調査の中で、なかなか資料整理も進行せず、資料に対する観察も不十分であるが、まずは中間報告としてこの概報を出せることは、非常に喜こばしいことである。この概報を作製するにあたり協力していただいたすべての方々に心より感謝したい。

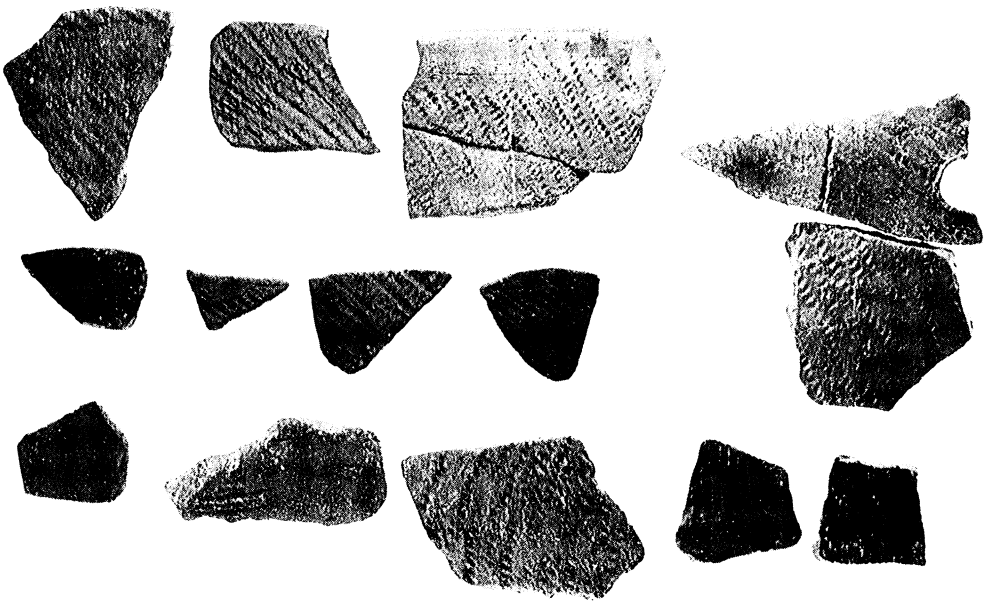
参考文献

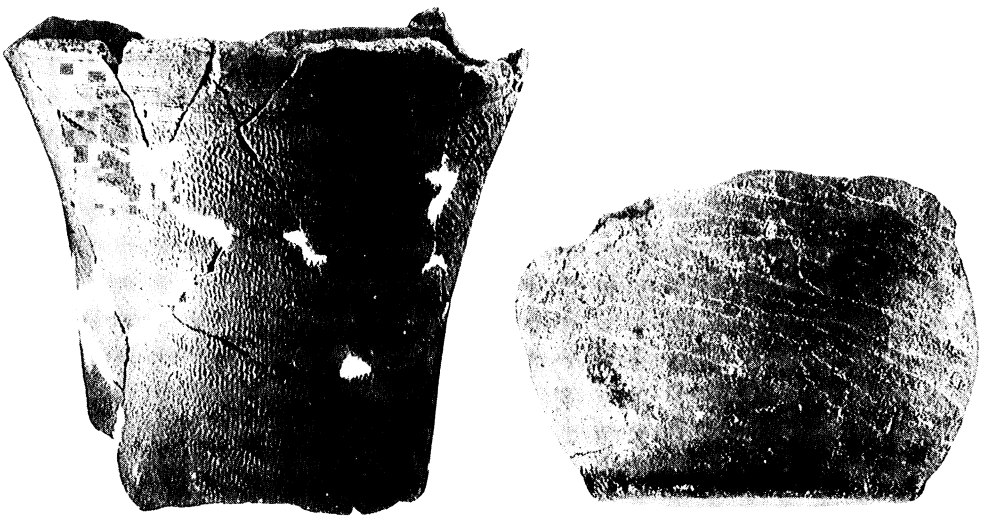
・相沢　貞順，1973年，「八坂遺跡調査概報」，東国古文化研究所
・麻生　　優，1953年，「竹管文土器に関する試論」，上代文化24号
・井上唯雄他，1972年，「粕川村誌」，勢多郡粕川村
・井上　唯雄，1978年，「群馬県下の歴史時代の土器」，群馬県史研究８
・小田静夫他，1974年，「埼玉県石神貝塚の調査」，埼玉考古13・14
・尾崎喜左雄，1973年，「宮城村誌」，勢多郡宮城村
・金子浩昌他，1973年，「古和田台遺跡」古和田台遺跡調査団
・金子浩昌他，1977年，「西広貝塚」，上総国分寺台遺跡調査団編
・桐生市教育委員会，1978年，「千綱谷戸遺跡発掘調査報告書
・鈴木　公雄，1963年，「千葉県山武郡横芝町姥山山武姥山貝塚の晩期縄文土器に就いて」，史学36－1
・　　，1964年，「姥山Ⅱ式土器に関する二、三の問題」，史学37－１
・薗田　芳雄，1954年，「千綱谷戸」，両毛考古学会
・　　，1972年，「千綱谷戸Ｃ－ＥＳ地点の調査」，両毛考古学会
・　　，1973年，「千綱谷戸遺跡東南地点発掘調査報告」，桐生市教育委員会
・中村恵次他，1975年，「飯山満東遺跡」，房総考古資料刊行会
・能登　健他，1977年，「梨ノ木平」群馬県教育委員会
・松本浩一他，1969年，「群馬用水土地改良地域埋蔵文化財報告書」，群馬県教育委員会
・若月　省吾，1980年，「笠懸村稲荷山遺跡」，新田郡笠懸村教育委員会

図版15　Ｋ２．ＣＪ－１号住居址出土の土器
図版16　ＣＪ－１号住居址出土の土器
図版17　ＣＪ－１号住居址出土の土器
図版18　ＣＪ－１号住居址出土の石器
図版19　Ａ３．第１地点出土の土器
図版20　第１地点出土の土器
図版21　Ａ３．第２地点出土の土器
図版22　第２地点出土の土器
図版23　第２地点出土の土器
図版24　第２地点出土の土器
図版25　第２地点出土の土器
図版26　第２地点出土の土器
図版27　第２地点出土の土器
図版28　第２地点出土の土器（上）
　　第２地点出土の特殊土製品（下）
図版29　第２地点出土の注口土器（上）
　　第２地点出土の岩版（下）
図版30　第２地点出土の耳飾
図版31　第２地点出土の耳飾
図版32　第２地点出土の石鏃（上）
　　第２地点出土の石鏃と第３地点出土の石鏃
図版33　第２地点出土の石器
図版34　第２地点出土の石器
図版35　Ａ３．第３地点出土の土器
図版36　第３地点出土の土器
図版37　第３地点出土の土器
図版38　第３地点出土の土器
図版39　第３地点出土の土器
図版40　第３地点出土の土器
図版41　第３地点出土の土器
図版42　第３地点出土の土器
図版43　第３地点出土の特殊土製品
図版44　第３地点出土の耳飾

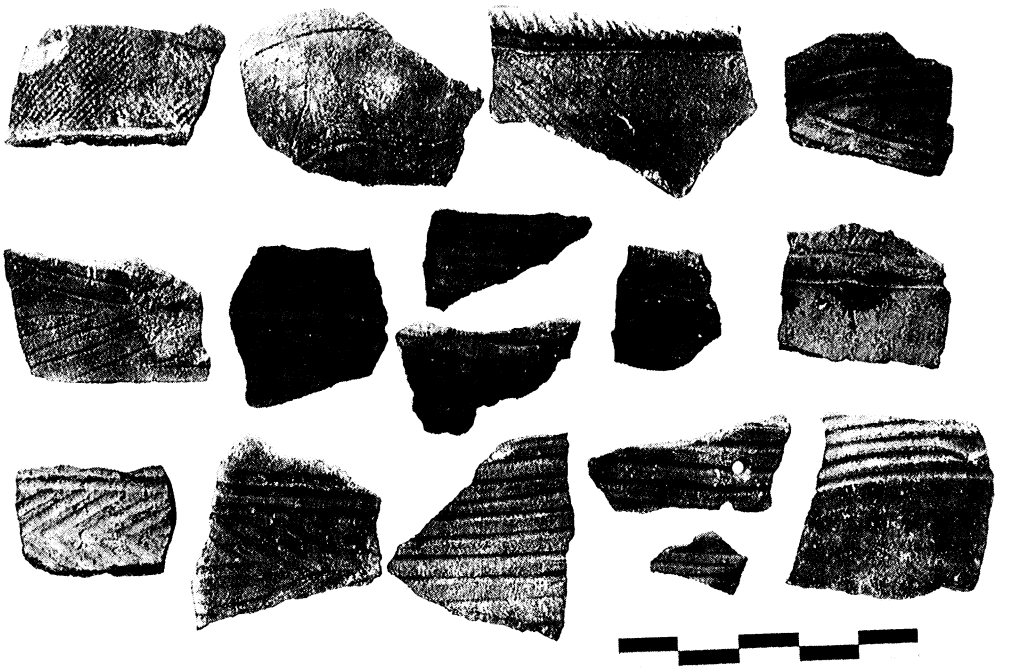


図版16

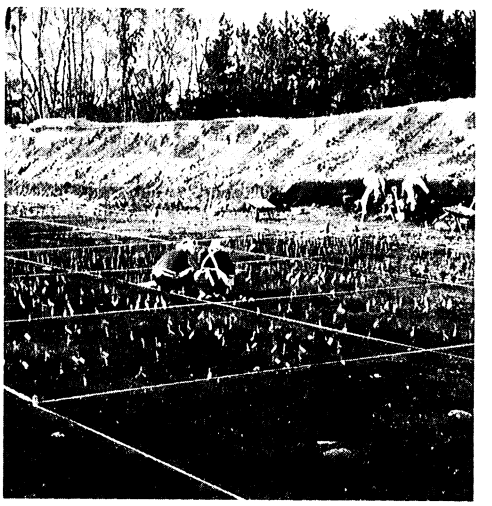




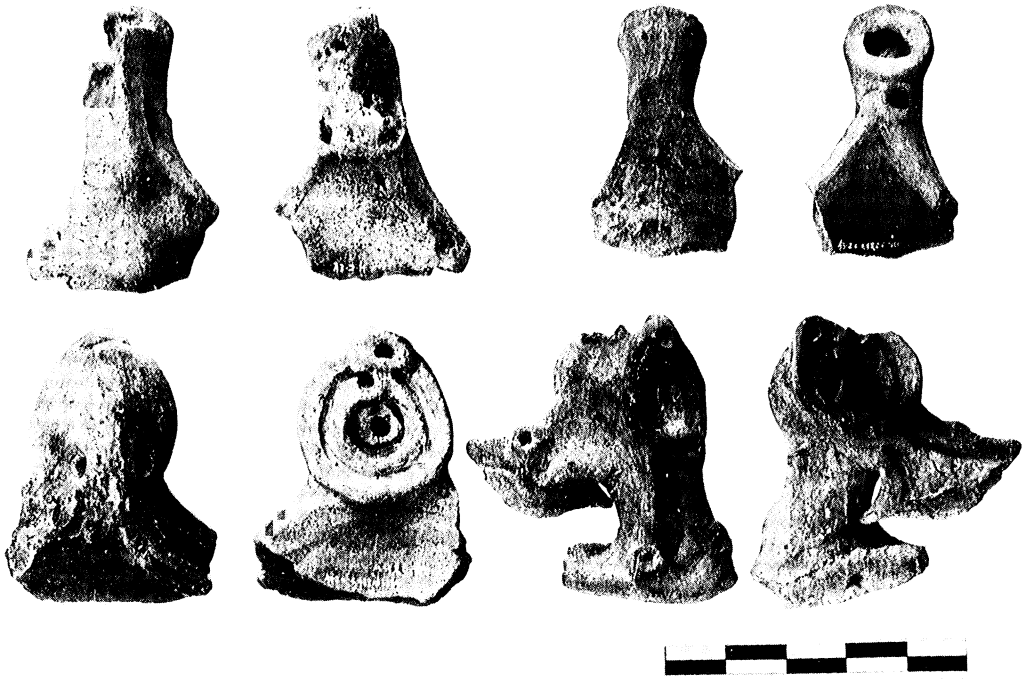
図版18

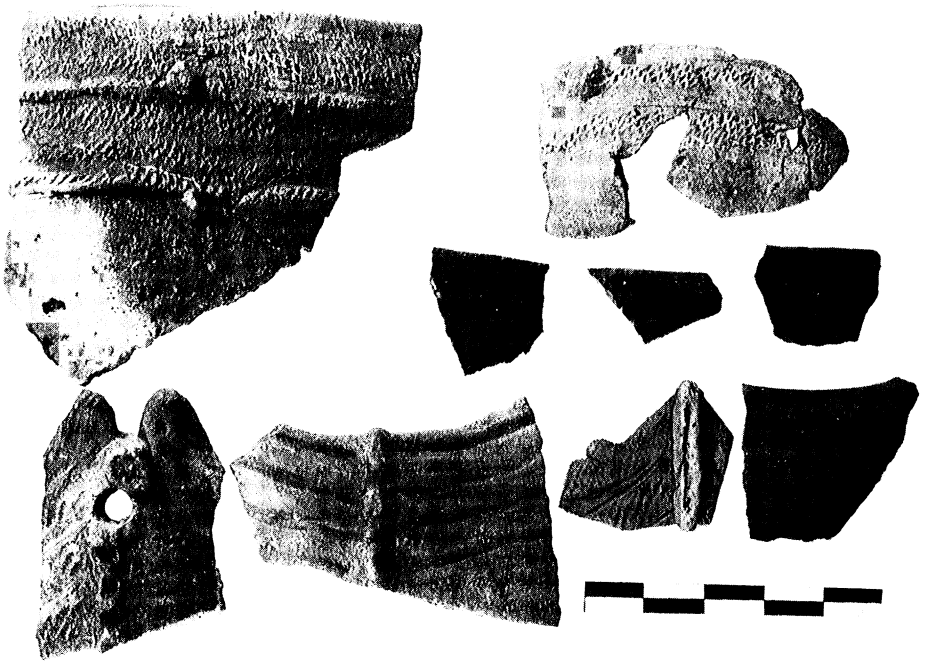


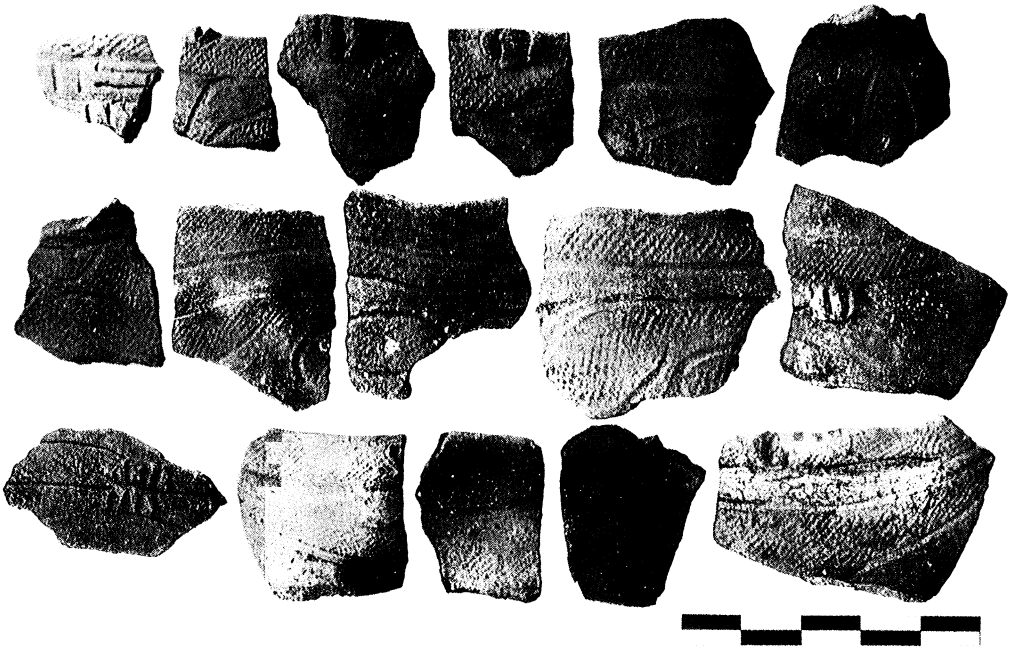
図版20

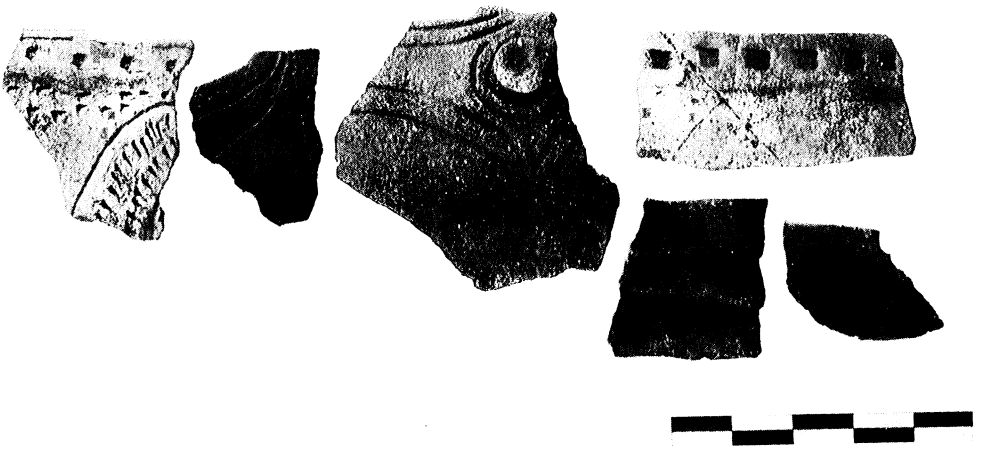


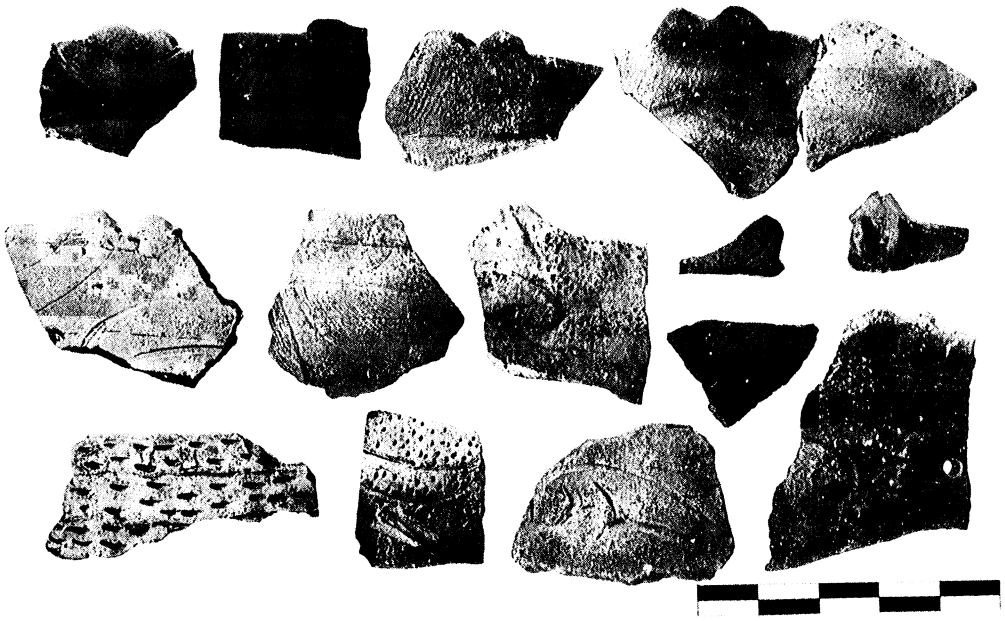
図版22

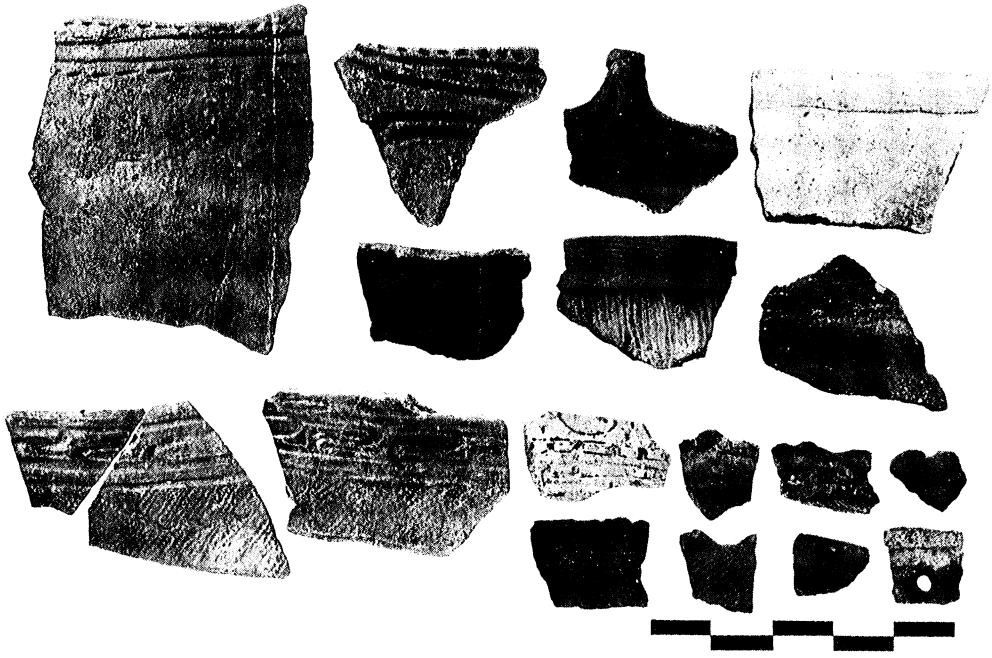




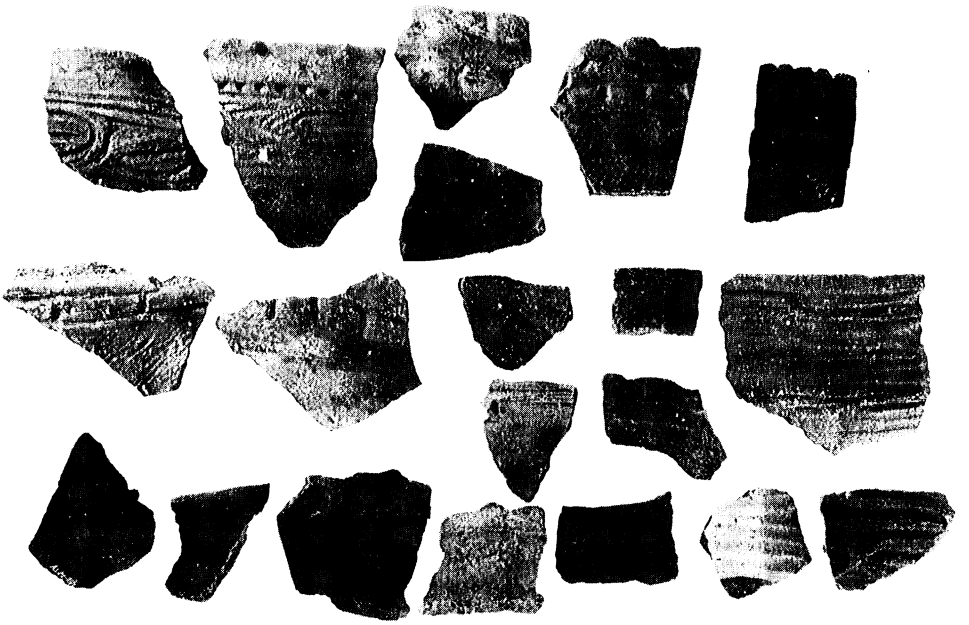




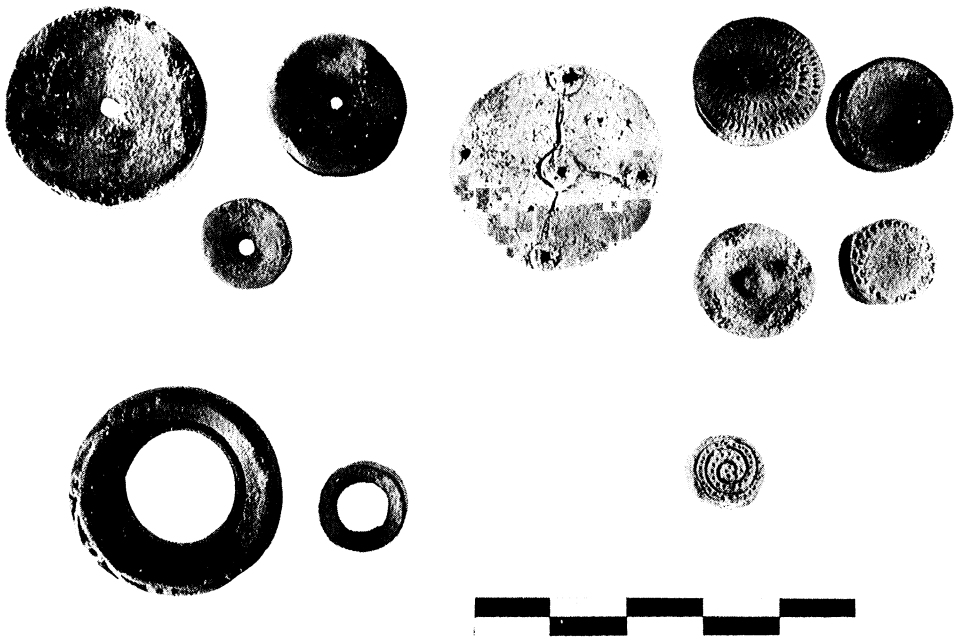


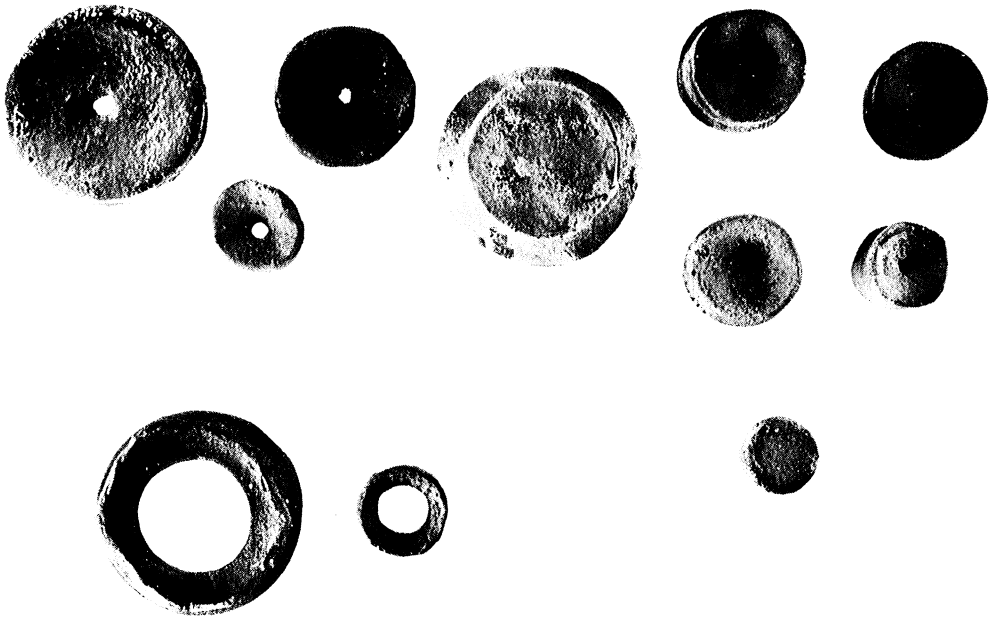


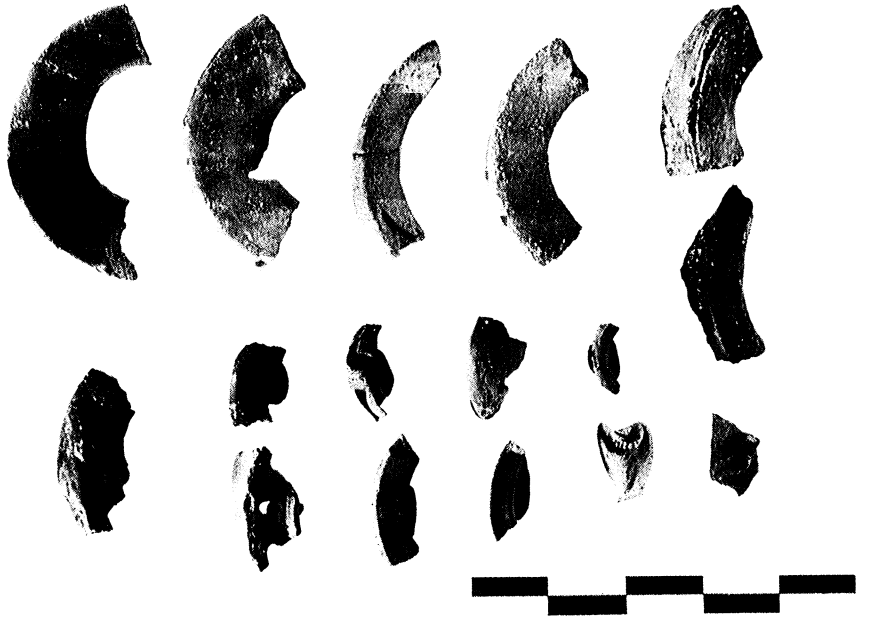
図版28

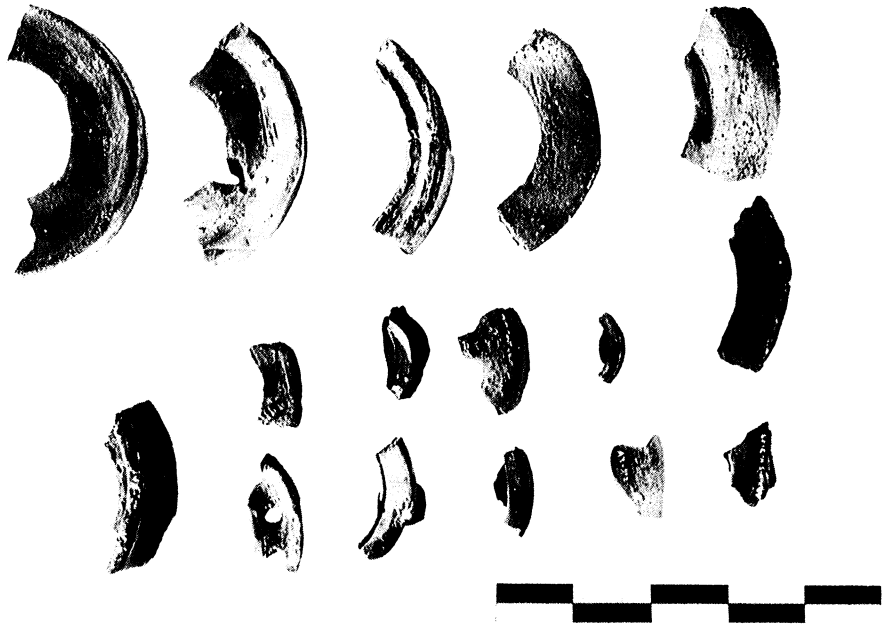


図版30





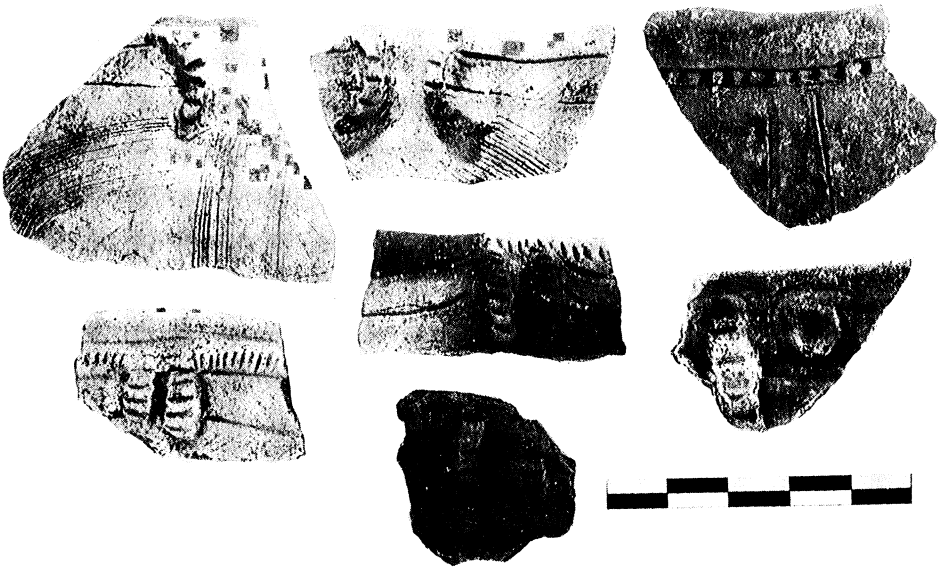


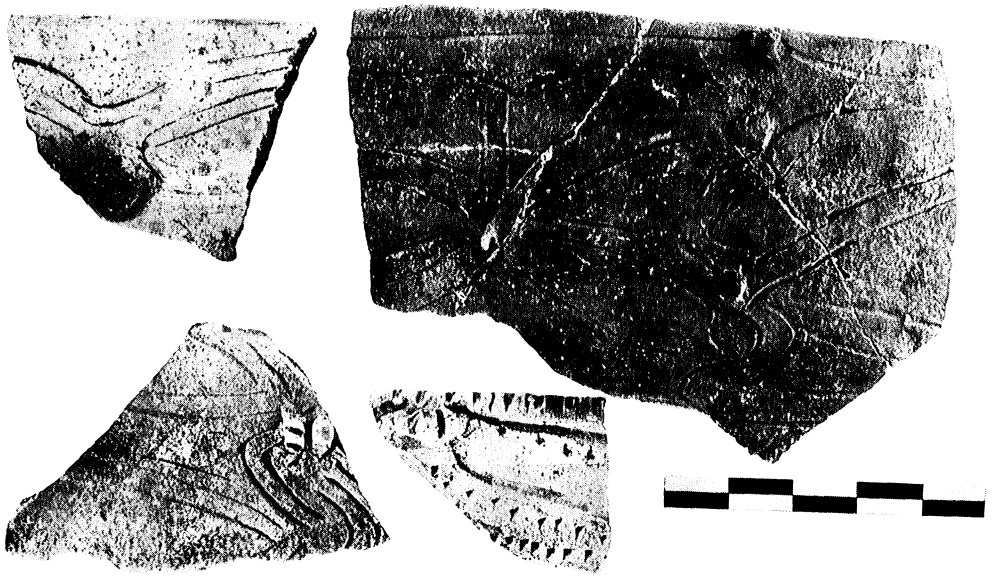


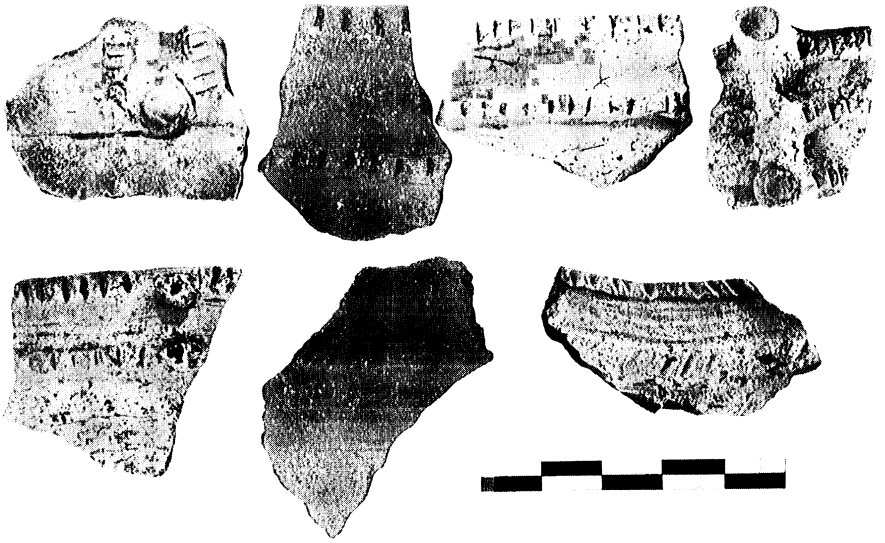
図版32

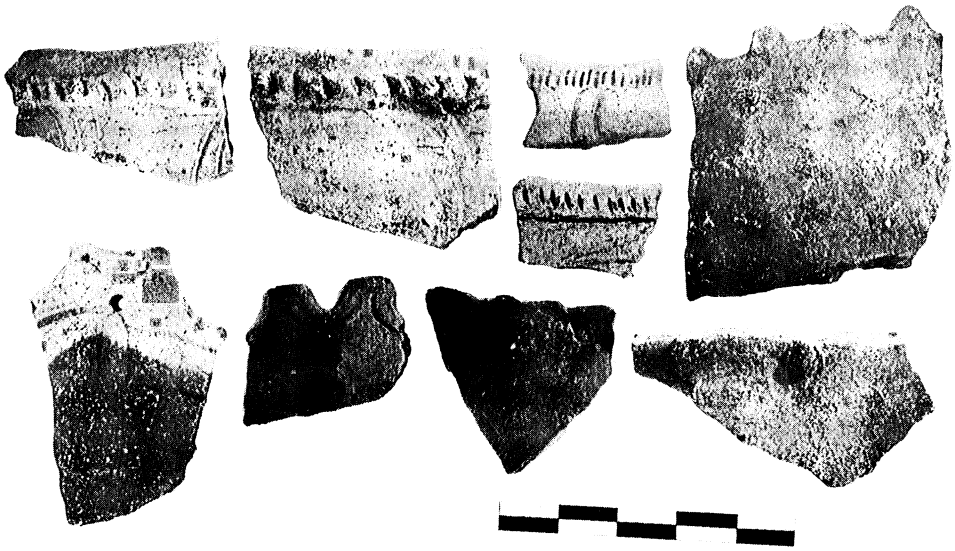
図版34

図版36









図版42

図版44

稲荷山KI・安通，洞A3
粕川村文化財報告第一集

発行日　昭和56年4月
編集発行　粕川村教育委員会
群馬県勢多郡粕川村西田面194
印刷者　㈲小林印刷所

正　誤　表

頁	誤	正
11	第２表備考（上から８行目） 稲川村指定史跡	粕川村指定史跡
12	第３表備考（上から13行目） 昭和　　年度調査	昭和50年度
25	追記	第13図 1.全体(左)　2.土器(中) 3.石器及び礫(右)(○印＝石器 ●印＝礫)
38	第24図	第25図
46	第31図第２地区出土の土器(2)	第２地点出土の土器(2)
47	第32図第２地区出土の土器(3)	第２地点出土の土器(3)

粕川村出土文化財管理センター